みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# B.ニャムボー：正直を貫いた政治家



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2009-04-28<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15021/00001400 |

小長谷有紀編『モンゴル国における20世紀(2)――社会主義を闘った人びとの証言』
国立民族学博物館調査報告　71:157-219(2007)

# B.ニャムボー
# ――正直を貫いた政治家

解説
1　生まれ故郷
2　ソ連軍の進駐
3　モンゴルの粛清
4　僧侶の粛清裁判
5　職場での粛清体験
6　通信士からパイロットへ
7　地方での幹部の仕事
8　チョイバルサンからツェデンバルへ
9　個人崇拝をめぐって
10　知識人の迷妄をめぐって
11　ツェデンバルの人となり
12　中央委員会第 6 回総会
13　批判の代償
14　地方での遊牧生活
15　ツェンデバルの更迭
16　ツェンドvsトゥムルオチル
17　民主化以降

## 解説

B.ニャムボー氏は1964年のモンゴル人民革命党中央委員会第6回総会においてTs.ローホーズとともに激しくY.ツェデンバル書記長を批判した人物としてつとに有名である。その当時の批判演説の内容はすでに『我は祖国を想う国民』(2004)という書にモンゴル語でまとめられている。当該書籍を監修したS.バータルによってさらに『愛国者たちとツェデンバル』(2005)でもB.ニャムボー氏については大きく取り上げられている。

B.ニャムボー氏とのインタビューは2005年6月7日，ウランバートル市内政庁付近にあるホテルで行った。上述の書籍と比べれば，短いにもかかわらず，あるいは短いからか，彼の語りはきわめて印象深くモンゴルの現代史を映し出してくれる。

彼は子ども時代に，旧ソ連軍が対日戦線に向けて大量に国境付近へと移動してゆくさまを父とともに目撃し，そのようすをいまも映画をみるかのように鮮明に語ることができる。そして，彼自身，やがてモンゴル人民共和国における戦闘機パイロットの第1世代となって旧ソ連軍との共同戦線へと送り出された。貧しい遊牧民の家庭に生まれた子どもは，はからずも軍事関係に従事し，昇進してゆくのである。しかし，その道のりは決して順調ではなかった。なぜなら，彼がまだ15歳だったころ，父親がモンゴルの現代史における最大の粛清事件にまきこまれて銃殺されたからである。

以来，彼は，政治的抑圧の被害者の1人であるという感覚を固持し続けながら，さまざまな粛清事件の目撃者として生きてきたように思われる。たとえば，僧侶が一掃されてゆく裁判のようすも生々しく再現されている。当時の一般社会の雰囲気を伝えるにあたって，人びとのあいだで語られていた噂話もふんだんに語りのなかに盛り込まれて

いることは見逃しがたい。そして何よりも，政治家の秘書として中央政権の周辺部に身をおいていた彼ならではの証言はとりわけ貴重である。有能であるがゆえに高位を追われた政治家たちは大勢いるが，彼らとの個人的な交流にも言及されており，語りの内容は独特となっている。

インタビュー全体を通じて，Y.ツェデンバル独裁時代にとどまらず，社会主義時代全般にわたって，その政治体制は畢竟，多くの捏造による追放などによって維持されていたことがきわめて具体的によくわかるだろう。

当時の批判演説の内容が記されている本を見ながら，「よくもまあこれだけ厳しく批判する勇気がありましたね？」と言うと，B.ニャムボー氏は「本当のことを言うのに何の勇気がいるものか？嘘でもつこうっていうなら話は別だがね」と，こともなげに応じて見せた。彼が政治の舞台に身をおきながら舞台裏を目撃し続けてきた理由は，まさしく未来への証言者として選ばれた人だったからではなかったか，と思われる瞬間であった。

## 文　献

Nyambuu, B.
2004 “Ekh oronoo l gesen irgen bi” Ulaanbaatar.（モンゴル語『我は祖国を想う国民』）
Baatar, S.
2005 “Ekh oronchid ba Tsedenbal” Ulaanbaatar.（モンゴル語『愛国者たちとツェデンバル』）

**ＢＮ**：バルダンドルジ・ニャムボー
**ＩＬ**：イチンホルローギーン・ルハグワスレン
**ＫＹ**：小長谷有紀

## 1　生まれ故郷

**ＫＹ**：お会いできて光栄です。あなたは，モンゴル人民革命党内にあった汚辱にまみれた状況と正直に闘った20世紀のモンゴルで最も有名な政治家の１人であるとモンゴル国民から評価されていると聞きました。今回のインタビューをあなたの幼少時のことから始めてはどうでしょうか？生まれ育った場所と時期，ご両親やごきょうだいについて，子どものころのことについてお話しいただけますか？

**ＢＮ**：そうしましょう。幼少時のことから話し始めましょう。私は1922年にトシェート・ハン・アイマグのダルハン・チンワン・ポンツァグツェレンギーン旗の「シャルハ

イの丘」という場所で生まれました。わが旗は，その後の地方行政単位改革によってトゥブ県セルゲレン郡に変わりました。今，私は83歳です。家族は代々「シャルハイの丘」を居住地としてきたそうです。わが家はひたすら牧畜に専念してきた，牧民の家系です。

**KY**：家畜はたくさんいたのですか？

**BN**：うちは裕福ではない家系で，貧乏な家庭でした。父の父，その父たち父方の先祖はほとんど家畜を持っていませんでした。ただし，母方は多くの家畜を持っていたようです。父は1888年に，やはり「シャルハイの丘」で生まれました。母は上から３番目の子どもだったそうです。子どものころから家畜を放牧して育った人です。

父は20歳で結婚したそうです。当時，母は17歳でした。２人は１頭の白馬と，１～２頭の乳牛と，数えるほどの羊，山羊で生活を始めました。父は牧畜のかたわら，狩猟をして，タルバガン（リス科マーモット属）を狩っていたそうです。概してタルバガン猟で生活を向上させたと話していました。父はモンゴル文字で読み書きを能くする人でした。革命前には，20歳の時から下級官僚として勤めていたようです。このような人びとは「ハル・ザイサン（黒い貴人）」と呼ばれていたと言います。

そうして生活しているうちに1921年の人民革命が起こります。革命初期には牧畜生活をしていたそうです。人民革命後，1920年代末期から1930年代初期にはモンゴル人民革命党員になっていました。そして一時期にはバグ（区）やソム（郡）の役所で働きました。結局，役所はやめて放牧生活をしていたようですが。そのうちに家畜の数も増え，郡の中でも裕福な家庭になりました。

わが家では毎年，競走馬の調教をしていました。私は幼少のころから父の調教した馬に乗って競争に参加していました。そのような生活をしていた1938年に，父は内務省に逮捕されたのです。

**KY**：なぜ？

**BN**：なぜですって？わかりません。父がなぜ逮捕されたか，内務省はまったく説明しませんでした。父が逮捕された原因を，私は，当時モンゴルで起こっていた政治状況を追究することによって自ら説明しようと試みました。私の父だけでなく，モンゴルの何千人もの父親が，このように逮捕されたのです。何千人もの父親が戻って来ることなく，小さな子どもたちや若い妻を永遠に置き去りにして死刑台にのぼったのです。モンゴルで，このような「悲惨な災害」がもたらされたのは1937年です。「大逮捕」が始まった年です。

1937年10月２日の「全権特別委員会」の決定が出され，数千人のモンゴル人が「政治的冤罪」によって死刑になったのです。「大粛清」は，このようにして始まりました。「特別委員会」は1937年末に組織されました。そこにはKh.チョイバルサン内務大臣，D.ロブサンシャラブ人民革命党中央委員会書記らが名を連ねていました。この「特別

委員会」の決定により，人びとは逮捕され，即刻死刑になっていったのです。

内務省は，私の父がどのような理由で逮捕され，どこに拘留されているか，誰にも何も言いませんでした。私たちは父が生きているかさえまったく知りませんでした。母は父のことを聞きに行きましたが，何もわからないまま戻って来ました。しかし，しばらくしてから父について「生きている！監獄に閉じ込められているらしい！禁固10年の刑を宣告されたらしい！」と噂されるようになりました。父だけではなく，父と一緒に逮捕されたわが故郷の人たちについても，このような噂が口から口へと伝わっていました。しかし，この話はすべて根拠のないものでした。

私は，父についての真実をモンゴルで民主化運動が始まったあとで知りました。1990年代初期に私は内務省文書館へ問い合わせて，父に関する資料を閲覧しました。この資料には父について「1938年８月に逮捕」と記録されていました。そして１ヶ月ほど拘留して，1938年９月から尋問を始めたようです。２回調書を取ったようです。１回目の尋問で父は「私は反革命行為をしていない。これについて話すことは何もない！」と供述していました。２回目の尋問の際に「ボグド・ジェプツンダムバ・ホトクトの宮内官のワーンジルという人の指導下にある反革命組織に加入したことは事実である。私たちは政府を打倒し，旧体制を復活させることを目指していた。私はこの活動に参加し，任務を受けていた。自分以外にわが故郷の５人を加入させてやった！」などと供述したようです。そして1938年11月10日「特別委員会」は父に死刑を宣告したのです。当時「特別委員会」の決定はその日に執行することが規則になっていましたから，1938年11月10日の夜，死刑は執行されたでしょう。

当時，「特別委員会」の決定によって死刑を宣告された人たちは，集団でトラックに積まれて，あるいは銃を持つ看守らに追われて死刑場に連れて来られ，掘った大きな穴のふちで顔を穴に向けて立たされて，後ろから頭を撃たれたようです。父もこのように死刑になったのでしょう。内務省文書館では，「特別委員会」の決定がどのように執行されたかに関する資料は見つかりませんでした。そのような資料は存在しないのかもしれません。1990年に内務省は父の名誉を回復させました。私は父の２回目の尋問に対する供述について調べてみました。「ボグド・ジェプツンダムバ・ホトクトの宮内官のワーンジルという人の指導下にある反革命組織」なるものはまったく存在していませんでした。また「ボグド・ジェプツンダムバ・ホトクトの宮内官のワーンジル」なる人物もいませんでした。父が「反革命組織に故郷の５人を加入させた」という５人もわが故郷にはいませんでした。この調書に記録された供述には，本当のことは１つもありませんでした。これはまさに「捏造事件」でした。

当時，父を尋問したのはD.バトフーという内務省の職員でした。この人はまだ生きています。私はこの老人に会って父のことを聞きました。するとその人は「バルダンドルジという人の名前，何年にどこで生まれたかなどだけが真実です。そのほかはすべて

嘘ですよ。２回目の調書は私たちが創作しました。そして署名させたのです。最初は署名するのを激しく拒否していましたが，私たちは何日か交代で殴り続けました。最後にはあきらめて私たちの偽造した調書に署名したのです。当時，署名を拒否した人には全員拷問にかけて調書を取っていたのですよ！」と言いました。

**ＫＹ：**お父さんが逮捕された時あなたは何歳でしたか？

**ＢＮ：**当時，私は15歳くらいでしたかね。２人の兄と弟と母と，５人が残されました。父が逮捕された時，私は１人の兄と一緒にウランバートルにいました。家にはもう１人の兄と，弟と母がいました。

私はそもそも15歳まで家畜を放牧しながら生活していました。わが故郷には小学校がなかったのです。小学校はずっとのちの1940年にできたのですよ。父はモンゴル文字での読み書きを能くする人でしたので，私が８歳か９歳になるとモンゴル文字を教えてくれました。２年ほど父にモンゴル文字を教わり，読み書きできるようになりました。

当時，わが故郷にロブサンツェレンという僧侶がいました。彼はチベット語と中国語も能くできて，チベット薬を調合するなど，みなに尊敬されていた人でした。父は私をこの人の弟子にして，私はチベット語を教わるようになりました。また，数学とモンゴル文字も引き続き教わりました。私は朝早くウマに乗って先生の家に行き，勉強をして夕方，家に帰ってきました。２年ほど，冬は先生の家に泊まっていました。私はチベット文字がとても嫌いでした。僧侶になりたくなかったのです。けれどもモンゴル文字と数学は大好きでした。古い制度下の文書係を勤められるだけの知識を身につけたと思います。

## 2　ソ連軍の進駐

**ＢＮ：**わが家は1930年代からウランバートルに来てナーダムの競馬に参加するようになりました。何年も参加しました。わが故郷はウランバートルから100～150キロ離れています。ときどきウランバートルの近くのボグド山に宿営していました。

1936年に私はウランバートルに来て通信技術専門学校に入学しました。当時，ウランバートルには５つの職業技術専門学校がありました。父の知り合いの紹介で入学することができました。冬にウランバートルに来て学校で学び，春に里帰りしていました。

1937年から私は通年ウランバートルに住むようになったのですよ。当時，国の内外の政治情勢は非常に厳しくなっていました。1935年からモンゴルの東部で国境事件がしばしば起こっていました。ボラン・デルスやハルハ河付近で日本軍が国境を侵犯する事件が多く発生していました。1936年にモスクワ市で「ソ連･モンゴル相互援助議定書」に両国の首相が署名したのです。

1937年の夏，私は故郷で夏休みを過ごし，８月の末に父と一緒にラクダに乗ってウランバートルへやって来ました。日が沈んで暗くなってきたころにヤールマグの丘に着くと，たくさんの灯りの行列が見えてきました。この灯りの行列はとても長く規則正しく続いていたのです。父も私も今まで見たこともないものだったのでびっくりし，わけがわかりませんでした。足を速めて灯りの行列に近づいてみると，ソ連兵士を乗せた，とても長い車列縦隊だったのです。車と車のあいだは20メートルほどの距離があったでしょうか。ソ連兵士は銃を持って列をなして車台に座っていました。縦隊はどこで始まってどこまであるのかわからないほど長いものでした。縦隊はウランバートル市に西側から入って来て東へ行進していました。父と私は縦隊が通り過ぎるのを待っていました。私たちは行列の向こう側に行きたかったのです。しかし，縦隊は終わりませんでした。秋の夜でしたので私たちは寒さに震えました。それは夜通し続き，夜明けにやっと終わりました。縦隊が終わってようやく私たちはウランバートルの北側に渡りました。それ以降，何日間も夜になると同じような縦隊が続きました。私たち２人の見たソ連軍縦隊は相互援助議定書による義務を果たすためにソ連政府がモンゴルへ派遣した軍隊だったのです。このように私は，ソ連軍のとても大きな部隊がモンゴルに入って来たできごとを自分の目で目撃しました。

## 3　モンゴルの粛清

**ＫＹ**：モンゴルの「政治的粛清」はいつ始まったのでしょうか？

**ＢＮ**：モンゴルでの政治的粛清は1920年代から始まっていたのです。当時，モンゴルの首相をはじめとして多くの政府高官が死刑になりました。政治的粛清は1990年代まで続いていました。モンゴルで民主化運動が始まったころに「政治的粛清」が中止になりました。1930年代から個人崇拝が強まり，大勢の無実の罪の人が犠牲になり，死刑となりました。その責任はKh.チョイバルサンが負うべきであると人民革命党史には記されています。1950～1960年代や，それ以降の政治的粛清は，Kh.チョイバルサン時代のそれとはかなり違います。

1920年代に始まった粛清は1930年代半ばに入っていっそう激しくなってきました。1930年代半ばから多くの人が政治的弾圧を受け，死刑になりました。その最初の事件は「ルムベ事件」です。その次が，「ジグジッドジャブ事件」でした。

ジグジッドジャブは1920年代初期，臨時人民政府の首相を一時，務めていた人ですよ。ルムベはソ連の東方勤労者共産主義大学（略称KUTVクートヴェ）を卒業した人です。卒業してから帰国してモンゴル労働者組合中央評議会議長を務めていました。その後，人民革命党中央委員会書記に任命されました。1932年にモンゴル西部で起こった「反革命運動」の制圧に参加していた人です。1917年のロシア十月社会主義革命か

ら逃走してバイカル湖付近から多くのブリヤート人が，モンゴルのヘンティー県やドルノド県に移住してきました。彼らはみなドルノド県とヘンティー県の北部で生活していました。すでにモンゴル国籍を取得していました。ルムベは人民革命党中央委員会書記としてブリヤート人の移民問題を担当していました。ルムベは1930年代半ばにヘンティー県に出張しました。そこで人民革命党ヘンティー県委員長と会ったのです。翌日，人民革命党ヘンティー県委員会職員のM. レンチンと一緒にウランバートルに帰って来たようです。彼らがウランバートルに帰って来るころ，ヘンティー県ダダル郡籍のマルハイン・ツェベーンという人を内務省が逮捕していました。彼はモンゴル革命青年同盟中央委員会副委員長，兼革命青年同盟ウランバートル市委員長を勤めていた人です。マルハイン・ツェベーンが逮捕されるまえに，ヘンティー県で協同組合長であったツェベグジャブという人が逮捕されていました。マルハイン・ツェベーンとツェベグジャブは同郷人でしたが，知り合いだったかどうかは定かではありません。内務省はマルハイン・ツェベーンを逮捕して調書を取り，彼を「ヘンティー県の協同組合長で反革命派のツェベグジャブと関係がある！」と誹謗しました。マルハイン・ツェベーンはこれを否定し，「ツェベグジャブとはまったく関係ない！」と繰り返しました。すると，内務省は彼を殴り，拷問にかけて偽造調書に署名させました。その偽造調書には「ツェベグジャブと関係があったのは事実です。私たちは最後にルムベを通して連絡を取りました。ルムベがヘンティー県へ出張で行くことを知っていました。ルムベはヘンティー県に着いてからツェベグジャブに私の手紙を渡し，返事を持って来ました！」と創作されていたのです。そしてこの偽造調書にもとづいてルムベを逮捕し，「反革命派のマルハイン・ツェベーン，ツェベグジャブらと関係がある！」と誹謗しました。ルムベは1年以上もこれを容認しませんでしたが，内務省は彼を殴り，苦痛を与え，地獄のような拷問をかけ続け，1年後にはやはり自分たちのでっち上げた調書に署名させることに成功したのです。そして，この偽造調書にもとづいて彼は銃殺されたのです。

当時，内務省の監獄で偽造調書に署名させるために使われた非常に残忍で冷酷な方法は「ソビエトの専門家」によって導入されたのでしょう。これはソ連の内務省で使われていたもので，内務大臣であったA.V. ヴィシンスキーが発明した方法です。A.V. ヴィシンスキーは1917年十月社会主義革命以前，帝政ロシアの監獄でI.V. スターリンと同じ部屋に一緒に閉じ込められていました。革命勝利後，スターリンはソ連共産党書記長，閣僚会議議長などの要職を務めるようになったあと，A.V. ヴィシンスキーをソ連検事総長に任命しました。A.V. ヴィシンスキーはこの方法を使ってロシアで十月社会主義革命を勝利に導いたV.I. レーニンの同志である真の共産主義者（ボリシェビキ）をみな殺しにしたのです。V.I. レーニンの同志であったN. ブハーリン，著名な赤軍の司令官M. トゥハチェフスキー，V. ブリュヘルなどの人びとをこのような方法で拷問にかけ，偽造調書に署名させ，それにもとづいて銃殺したのです。このように銃殺された人は大

量にいました。ロシアでの政治的粛清の範囲は，わが国のそれよりも非常に大規模で残虐なものでした。ロシアの人びとを恐怖に陥れ，血の海に沈めたのです。I.V.スターリンによるこのような残虐な「赤色テロ」なしでは十月社会主義革命というものは１日も存在できなかったことでしょう。

わが国では，1936年にKh.チョイバルサンが内務大臣に任命されてから，まさにこの方法が使われ始めました。何も事件を起こしていない人を他人の偽造調書によって逮捕し，さらなる偽造調書を取るため，残忍な方法で殴り，苦しめ，拷問にかけるのです。チョイバルサンは内務大臣になる以前，人民委員会第１副議長を務めていました。際限なき権力が彼に集中し始めました。チョイバルサンは1921年革命指導者の１人ですが，革命勝利後，一時，彼は高い地位に任命されませんでした。これは彼の個人的な性格と関係があったかもしれません。「政治的に取り返しのつかないことをしでかしかねない人 」と多くの人から警戒されていたのかもしれません。一時，無職になったこともあります。ルムベ事件に関連して多くの人が逮捕されました。その時，チョイバルサンも逮捕されたようです。逮捕された人びとの一部はシベリアの収容所に送られました。そのなかにチョイバルサンも入っていたのです。当時，ロシアへ送られた人びとはまず帰っては来ないものでした。ところが，チョイバルサンはまもなく帰って来たのです。いったいなぜ彼を解放して帰国させたのか，今日まではっきりした資料はありません。ソ連のKGBは「Kh.チョイバルサンは将来的に協力できる人間だ！」と判断したのかも知れません。KGBはチョイバルサンを利用するために帰国させたのかもしれません。チョイバルサンはソ連から帰って来て以降，輝ける政治的キャリアを積むことになりました。内務大臣，農牧大臣，国防大臣，人民委員会副議長などのさまざまな役職に順調に昇っていきました。誰が彼をこのような高い役職に推薦していたのかはたいへん興味深い問題です。

当時の首相はP.ゲンデンでした。彼がチョイバルサンを推薦したわけではないことは明らかです。P.ゲンデンは自尊心が強く，国益を守るためには厳格で激しい気性の人でした。彼はソ連を何度も公式に訪問してI.V.スターリンソ連共産党書記長をはじめソ連政府の指導者たちと会談しました。両国の協力関係について積極的に政府間対話を行っていました。当時，モンゴル社会では仏教の影響が強かったのでした。P.ゲンデンは仏教，寺院，僧侶の問題についてソ連共産党の幹部と意見交換をしていました。I.V.スターリンらは「モンゴルの仏教，寺院，僧侶は反革命勢力である！」と見ていたことでしょう。だから，「モンゴル仏教を内務省の力で廃絶しなければならない」という態度を取っていました。一方，わが首相は「モンゴルの仏教に対して内務省の力を使ってはいけない！」という立場に立っていました。この問題に関する双方の対立は長く続いていました。P.ゲンデンとI.V.スターリンとのあいだでこの問題について激しい議論をくり広げていたようです。「P.ゲンデンがI.V.スターリンの胸元を締め上げて頬をはたい

た！」という噂がありましたが，本当かも知りません。とにかく，P.ゲンデン首相はI.V.スターリンの横暴にひるまずに自国の立場を守ってきました。仏教の問題はモンゴル内部の問題でしょう。仏教について何も分からない「野蛮なボルシェビキ」であり，血で手を汚したI.V.スターリンに干渉される必要がないことは言うまでもない，わかりきったことでしょう。そもそもI.V.スターリンは何の教育もない人でしょう。にもかかわらず「国際労働者階級の偉大なる指導者」などと数多くの呼称がついていました。

I.V.スターリンによる行為を理論的に説明しようとするロシア人がいるようですが，ここには何の理論も要しません。I.V.スターリンは，権力を独占するためにロシア人民を血の海に投げ入れた輩です。無知蒙昧な人だったことが，いかなる方法を用いてでも権力を独占しようとする強欲さに影響したのではないでしょうか。この目的を達成するために無罪の人びとを大量に殺害したのです。教育のある文化的な人は決してこんなことはしないでしょう。これは世界史によって証明されていることです。それにしても，なぜこういう人が政治権力を握ることができたのか，それは別の問題です。こうして考えると，社会革命と言われるものはどんなものでも望ましいものではないように思われます。国家の権力を握っている者の性格や教育水準によって，国家と国民の運命が左右されてしまうのです。

I.V.スターリンを指導者とするソ連共産党幹部は，モンゴルの仏教問題を理由にモンゴルへの商品輸出を拒否し始めました。これはI.V.スターリンができる唯一の仕事だったかもしれません。両国関係にこのような困難が生じたので，モンゴル人民革命党の中でP.ゲンデンの立場を批判する傾向が現れてきました。モンゴルの仏教，寺院，僧侶に関して，ソ連共産党の立場に対して譲歩しようとする人びとが幹部の中にいました。そういう人たちを人民革命党中央委員会書記のロブサンシャラブ，エルデブオチル，チョイバルサンらが率いていました。1936年に彼らは力をあわせてP.ゲンデンを辞職させました。これがモンゴルでの「政治大粛清」の始まりとなりました。当時，ソ連からモンゴルに来ていた大使はスミルノフという人でした。

P.ゲンデンの辞職後，内務省は114人の政治家や有名な活動家を逮捕しました。この事件は「114人の事件」と名づけられていました。P.ゲンデンはこの人たちの逮捕に強く反対していました。P.ゲンデンの辞職後，モンゴル政府の中に彼と同じ考えを持った人が少しばかりいました。その１人はM.デミドでした。M.デミドは，人民革命党中央委員会幹部会員，国防大臣，全軍総司令官を務めていて，民衆から尊敬を得ている人でした。国の指導者として２番目の人でした。人民革命党の幹部に入ったチョイバルサンたちは，P.ゲンデンの辞職後，M.デミドを辞職させる計画を立て始めました。この事件は次のように展開しました。

1937年８月にM.デミドは，ソ連赤軍創立20周年記念式典への招待をK.E.ボロシロフ元帥から受けました。当時，K.E.ボロシロフはソ連の国防大臣でした。M.デミドはモ

ンゴルの国防大臣，総軍司令官としてこの招待を受け，式典に参加するためにモスクワへ出発しました。当時，わが国には鉄道がなかったため，モスクワまで行くにはウランウデまで車で行ってそこから列車に乗って行きました。M.デミドはウランウデに到着し，列車に乗りました。式典に参加するためでしたから，夫人と一緒でした。夫人以外に国防省の職人が何人も同行していました。列車に乗ってしばらく走っていると「緊急な問題が起きたのですぐに戻って来てください」という連絡が入りました。そこで，M.デミドはシベリアのある鉄道駅で列車を降り，ウランウデ経由でウランバートルに戻って来ました。夫人と同行者は，そのままモスクワへ行きました。ウランバートルに戻って来ると，緊急に帰って来る必要などなかったようで，誰が呼び戻したのかもわからない状態でした。数日後，ウランウデ経由で再びモスクワへ行きました。ウランウデで旅客列車に乗る必要がありました。しかし，彼を旅客列車に乗せませんでした。その代わりに，貨物列車に客車の車両を２両連結し，それに乗せました。この旅を段取りしていたソ連側の人びとは「列車の時刻が合わない！」と説明していたそうです。連結した車両にD.ジャンツァンホルロー国防省大砲局長，在モンゴル・ソ連大使館のブリヤート系のS.ドルジャーエフ参事官夫妻，在モスクワ・モンゴル大使館のD.ゴムボスレン，モスクワに留学していたR.ダグズマーという女性も乗っていました。ダグズマーはゴムボスレンの親戚だったのかもしれません。このような人びとが臨時客車に乗っていました。貨物列車には食堂車がなく，車両の中に１つだけ大きなまるいテーブルがありました。彼らはみなでそのテーブルを囲んで，朝，昼，晩と食事をしていました。ソ連側が食事を作ってくれていたそうです。そして，シベリアのタイガ駅に着いたのでした。そこで彼らに昼食が用意されたのでした。まずはスープで，つぎにバンシ（水餃子）だったようです。彼らはそのバンシを食べて全員，気を失ってしまったそうです。これについてはダグズマーがのちに語っています。彼女の話によれば，しばらくして気がつくと，M.デミド将軍とD.ジャンツァンホルロー局長の２人はいなくなっていて，他の全員は倒れていたそうです。そして列車はそのまま止まらず，モスクワへ走りました。モスクワに着くと彼らは入院することになりました。「食中毒である！」と診断され，治療を受けているあいだに，「M.デミド将軍とD.ジャンツァンホルロー局長の２人が亡くなった！」と聞きました。こうして彼女は自分と一緒に行った２人が死んだことを知ったのでした。すでにM.デミド将軍の妻はモスクワにいましたから，「M.デミド将軍が死んだ！」と聞いてすぐにシベリアのタイガ駅へ向かいました。駅に着いて夫の遺体を見せるように要求しました。はたしてM.デミド将軍の遺体には，打撲の跡があって身体全体が茶色になっていましたが，誰も説明をしてくれませんでした。

そうしてM.デミドとD.ジャンツァンホルローらの遺体はモンゴルへ運ばれました。２人の遺体がウランバートルに着いた時のことを私はこの目で見ていました。1937年

のことです。「M.デミド将軍が死んだ！」と国民はとても悲しんでいました。新聞にM.デミド将軍の死について記事が出ました。国中で喪に服すよう発令されました。反響はとても大きいものでした。そんな状態が10日間ぐらい続きました。功労のあった人たちのためのアルタン・ウルギー墓地で葬儀が行われ，記念銅像を立てました。

そして何日も過ぎないうちにある日突然，「M.デミドは反革命派であった！」という話題が出て大騒ぎとなりました。新聞には「ゲンデンとデミドらは反革命活動をしていた！」と書き立てられるようになりました。彼らについてありとあらゆる悪口雑言が並べ立てられていました。人びとの心は不安定になり，国全体が恐怖に襲われてしまいました。真実と虚偽を区別することが難しくなっていたのでした。当時はそんなふうになっていたのでした。M.デミド将軍の死は最初から計画的に実施されたことですよ。このように「ゲンデン・デミド反革命派事件」というのもまた１つの「捏造」でした。

## 4　僧侶の粛清裁判

**B N**：1937年，夏に私が地方にいた時，衝撃的な事件は続いていました。「ヨンゾン・ハンボ・ロブサンハインチグ大僧正，ダムディン僧正，マンジュシュリ寺のツェレンドルジ活仏らを内務省が逮捕してしまった！」と言われていました。当時，モンゴル人はとても信心深かったので，こうした事件は国民をおののかせました。「先生が捕まった！」と，口から口へ伝わっていきました。とてもおおごとになっていましたよ。ただし，こうした噂はひそかに語られていましたよ。人びとは自分も捕まるかもしれないと怖がって，概しておおっぴらには語らないのでした。モンゴル社会全体が恐怖に襲われていたのです。「何が起こるのか？どうなるのか？」とずいぶん心配する人たちもいました。大いに不穏な社会だったのです。

私が夏休みを終えてウランバートルに帰って来ると，この話は，ますますおおごとになっていきました。誰もが口々にぶつぶつ言うようになりました。その秋，私がウランバートルに戻って来るとまもなく，逮捕された高僧の裁判が行われました。裁判は，現在，政府庁舎のある場所にあった「ブンブグル・ノゴーン劇場（まるい緑の劇場）」で行われました。この劇場はのちに焼失したのです。わざと燃やしたのか，それとも偶然焼けてしまったのか，知るよしもありません。あそこで，内務省に逮捕された多くの高僧が「政治的冤罪」によって裁かれたので，わざと燃やしたのかもしれません。あの建物が勢いよく燃えている時，「よく燃えているよ！」と人びとが言った，という話もあります。本当にそれを燃やしてしまいたい人はいたかもしれません。

今のスフバートル広場は当時とても石ころの多い大きな広場でした。スフバートル像があるところに，当時，木造の演壇がありました。祝日になると，広場では労働者の集会が開催され，人民革命党の幹部が演壇に登って労働者に向かって演説をしていまし

た。当時は「労働者の祝日パレード」はまだ行われていませんでした。パレードはのちに始まったものです。

裁判が始まるころ，木造の演壇の両側に２本の太い柱が立てられ，スピーカーが設置されました。そして，劇場内で行われている裁判の様子がスピーカーを通して放送されていました。スピーカーのところには多くの若い僧侶たちが集まり，耳を傾けていました。ときどきスピーカーは途切れてしまいました。私は劇場の北側近くに住んでいましたので，学校からの帰り道に広場を横切るのでした。裁判は何日間も続きました。ヨンゾン・ハンボ・ロブサンハインチグ大僧正はチベット人でした。例のスピーカーを通じて彼の声を聞いていました。彼はチベット人ですからそれほどうまくモンゴル語を話すことはできないのでした。意味がよくわかりませんでした。私は子どもでしたから，奇妙な声の人が話していたとしか思われませんでした。いったい何を話しているのか私はまったくわからなかったのです。ある日，例のごとく学校の帰りに広場まで来ると，劇場の西側にたくさんの若い僧侶たちが集まっていました。何が起きているのか見ようと思って近づくと，そこには大きな木の塀が作られていました。その木の塀に沿って若い僧侶たちが立っているのです。木の塀の中には軍服を着た２人が立っています。１人は軍長のようでした。もう１人は兵士のようでした。兵士は機関銃を持っています。そして木の塀に沿って立っている若い僧侶たちに機関銃を向けて「撃つぞ！撃つぞ！」と大きな，大きな声で叫んでいるのです。私は若い僧侶たちの中にもまれて木の塀のそばまで来ていました。すると，兵士の持っている機関銃の銃口が私に向けられるようになりました。そうして兵士は「撃つぞ！」と再び叫んでいるのです。私に向かって叫んでいるような気がして，踵を返して逃げました。木の塀に沿って立っている若い僧侶たちは「今，ヨンゾン・ハンボが話している！もうじき裁判は終わる！」と互いに話しています。劇場には西側に入り口が１つだけありました。ちょうどそこに大小２台のバスが待機していました。その大小２台のバスの後部のドアは開いていて，劇場のドアとちょうど接していました。裁判が終わると高僧たちをバスに乗せていくにちがいないのでした。そこにいた若い僧侶たちは高僧たちが出て来たら奪還しようとしているようでした。もし，高僧たちを奪うべく木の塀に若い僧侶たちが押しかけた場合には，彼らに発砲できるように機関銃を向けていたのでした。私は機関銃を恐れて木の塀からかなり遠くに立っていました。そこに立っていた若い僧侶たちは互いにひそひそ話していました。裁判はなかなか終わりません。そうしてかなり時間が経ちました。機関銃を持った兵士が時おり「おとなしくしていろ！さもなければただちに浴びせるぞ！」と大声で言うのです。突然，そこに集まっていた若い僧侶たちが大声を出して南の方へ走り出しました。私も彼らのあとを追って走りました。裁判で刑を受けた高僧たちを，劇場の別の入り口から出して別のバスに乗せて運んだようなのです。西側の入り口で待機していたバスはカムフラージュでした。このように高僧の裁判が行われたのを私は見たので

す。国民は非常に悲しんでいました。

それ以前の1938年９月10日，一晩に政府や軍の幹部ら65人が内務省に逮捕されたという記録があります。彼らを逮捕する時，まず内務省に呼ばれました。そしてKh.チョイバルサン内務大臣の執務室に連れて行かれます。チョイバルサンがその人に「あなたを逮捕した！」と言い渡します。チョイバルサンがそう言うや否や，そこにいる内務省の職員たちがただちに手錠をかけました。一夜に65人をこのように逮捕したのです。翌日，人びとのあいだでいろいろな噂が出ていました。「クーデターが起こっているのか？クーデターが起こっているようだ！」などと人びとは話していました。人びとのあいだに恐怖が伝わっていました。このような逮捕は９月30日まで続いていました。９月30日に70人が逮捕されたという記録があります。70人の中に人民委員会副議長で全軍副司令官のD.サムボー，国防省副大臣S.ダリザヴ，参謀長Ｊ.マルジ，軍病院長S.デンデヴ，国防省第３局長CH.オチルバト，文部大臣R.バトトゥル，国家小会議議長Ts.ラムジャブ，ドルノド県知事Ch.シャグダル等がいました。そのうちの14人の裁判が特別に行われました。

私はその裁判が行われている劇場の入り口のあたりにしょっちゅう見に行きました。人民革命の党員と身分証明証を持っている人だけが入れるのです。劇場の入り口は銃を持つ兵士がつねに警備していました。あいかわらずスピーカーからも裁判を放送していました。彼ら14人の裁判は10日以上続きました。そして判決が出ました。全員に死刑の判決が下されました。

そのうちの２人は国家小会議に上訴しました。当時，L.ドグソムが国家小会議議長を務めていました。L.ドグソムは1921年革命の有名な革命家でスフバートルの同志だった人です。２人の上告については，国家小会議が審議して死刑を取り消しました。元国家小会議議長Ts.ラムジャブ，ドルノド県知事Ch.シャグダルの２人でした。

ラムジャブの息子ワンガンはのちにわが国の文化芸術の「黄金時代」を築いた１人です。もう１人の息子ナツァグも文化功労者です。ラムジャブ氏はこれら子どもたちのおかげで許されたたのですよ。ラムジャブとシャグダルの２人は許され，それ以外の12人が死刑を受けました。

1990年に政治的弾圧の犠牲者の名誉回復が始まりましたよ。この名誉回復活動の一環として，モンゴル内務省は政治的冤罪に連座した人びとを死刑に処した刑場を確定しました。それまでは秘密にされていたのでした。ウランバートル市西部にあるソンギノハイルハン山の北側に１つの大きな谷があります。それこそは内務省の死刑場でした。そこで，「政治犯」に問われて死刑の判決を受けた人びとが銃殺されたのです。あの12人は10月24日夜，銃殺されました。その銃殺には人民革命党幹部が自ら参加していたそうです。A.アマル，L.ドグソム，Kh.チョイバルサンらが来たそうです。死刑を受ける人たちの手を縛り，口に布を押し込んでいました。全員，掘った穴のふちで顔を穴

に向け，しゃがんだ姿勢で銃殺されました。２人を銃殺した時点で，A.アマルが車に乗ってしまいました。その夜は寒かったのです。するとKh.チョイバルサン内務大臣が「アマルはなんだって車にすわっているのか？あいている穴はあるか？あればアマルも銃殺しよう！」と叫んでいたそうです。チョイバルサンがモンゴル人民革命党の幹部を内務省の刑場に無理やり連れて来たのは，彼らを脅かすためであったことは明らかでしょう。

1990年代初期，12人の遺体がある死刑場を確定し，発掘してそこにある遺体を調べました。するとそこから13人の遺体が見つかりました。内務省の裁定によれば12人の遺体であるはずでしょう。どうして１人多いのかと大事になりました。そしてこういうことだったのです。あの夜，そこには多くの人や車がやって来て，銃声がするし，騒がしいので，付近に住んでいた牧民の，17～８歳の青年が１人，こっそりやって来て，どうなっているのかとのぞきました。そこを内務省の職員に捕らえられ，12人と一緒に銃殺されたそうです。これは内務省が自分たちの恐ろしい仕事について証人を残さないためにしたことです。

1990年代初期にその刑場に，政治的弾圧の犠牲になった人びとのために記念碑が建てられました。記念碑には銃殺された人びとの名前と共に「12 ＋ 1 ＝ 13」と彫りつけられました。

1937年の秋，父と２人でウランバートルに来た時から，こうした逮捕は絶えまなく行われていたのですよ。毎日，大量逮捕のことを耳にしていました。僧侶たちを大量に逮捕し始めました。そうしてみんな死刑になったことでしょう。

当時，ウランバートルのすべての寺院や堂は閉鎖されましたよ。高僧は逮捕されて処刑され，若い僧侶たちは還俗させられました。閉鎖された寺や堂の仏像はあちこちに転がってごみとして横たわっていました。燃えるものは積み上げておいて焼却してゆきました。経典はあちこちに積み上げられ，まとめて焼かれていました。ウランバートル市内のいたるところで，焼き残った経典の紙片が風に吹き飛ばされ，くさい匂いがして，暗い煙が立ち込めて，とても気持ちの悪いものでした。寺院や堂などの建物もすべて燃やされました。

最近，ハンビーン・オボーというところで工事をしていた建設会社は大量の遺骨を掘り出したそうです。それで歴史学者が大勢そこに行って調査したそうです。彼らは「これこそ僧侶たちを処刑した場所である！」と確定しました。そこからは数百人の頭蓋骨が出て，それらにはすべて弾の孔がありました。このことをモンゴル人民革命党は秘密にしようとしたのです。モンゴル人民革命党の幹部は取材に当たっていた記者やマスコミに圧力をかけたそうです。幹部らは「選挙前に自分たちの恐ろしい罪が明らかになり，有権者の選択に影響を及ぼす！」と恐れていたそうです。

モンゴルのガンダン寺院に観音大仏像がありましたね。当時，この観音像は解体され

ました。その脇には，同じ大きさの白い箱がたくさんありました。その箱に解体した仏像を入れていました。この仕事が数日間続きました。そうしているうちに，ある日突然，箱が消えたのです。「あれはロシアに持っていったそうだ！」と人びとはこっそり話していました。1990年代からモンゴル文化基金は観音像の行方を追究しました。ロシア側からは，ドイツとの戦争時に溶かして大砲の弾を造ったのではないかという説明を受けました。当時，私は子どもだったので起こっていたことの意味をよく理解していませんでした。当時は毎日何か事件が起きていました。それで子どもたちはそのたびに興味を持って現場を訪れたものです。年配の人びとは深い恐怖を感じていたようです。人びとは互いに恐れて家から出かけなくなりました。子どもと若者だけが外出していました。毎朝起きると，何か新しいニュースを耳にしていました。「どこかの局長，どこかの大臣が逮捕された！」と毎朝，何か新しい情報が聞かれるのでした。このような状況は1939年末まで続きました。

## 5　職場での粛清体験

**ＢＮ：**私は通信専門学校を卒業していませんでした。３年生だった時，何人かの学生が選ばれてモールス信号機による通信訓練が行われました。以前の従事者はみな逮捕され，処刑されてしまったとのことでした。そこで専門技術者がいなくなり，私たち学生に訓練させ，そこで働かせるようになったのです。

1938年，そこで働くようになってまもなくのことです。ある夜，宿直でした。職場では私たちは交代で宿直しなければなりませんでした。宿直は７人ですることになっていました。私たちは夜，職場にいました。眠くてうとうとしかけていました。何とか眠気と戦って起きていました。それでもしかたなく１分は眠ってしまったのではないでしょうか。突然，私たちの職場に外部の人が大勢入って来ました。彼らの中には兵隊の服を着た人は１人もいませんでした。みな平服でした。私は彼らが平服だから内務省の人たちだとすぐにわかりました。身体が震えました。私の横には私より２～３歳年上の若者が座っていました。彼に対して内務省の人は１通の文書を与えて読ませます。もう一方にはD.ヤダムスレンという若者が座っていました。彼にも内務省の人は１通の文書を与えて読ませます。私たちの局長は22歳の背の高い格好の良い若者でした。彼にも１通の文書を与えて読ませます。彼はドルノド地方の通信業務を担当する人でしたよ。彼らが文書を読み終えると，「わかったか？」と言います。そして「わかった！」と答えたようでした。押し入って来た人の中の１人が「立て！」と兵士に命じるように号令しています。

彼らを逮捕しているのだということは直ちに理解できました。私にもまた紙が配られるものと私は待っていました。私たちの机の上にあった文書をすべてめくって調べて，

細い紐でくくり，束にしました。そして，内務省の何という局なのでしょうか？よく知りませんが局の印を押してしまいました。

そうして，それらの文書を持ち，あの３人を前に追い出して出て行きました。私ともう１人の男性，そのほかに２人の女性と全部で４人が職場に残りました。みな恐ろしくて一言も言うことができずにいました。しばらくして正気を取り戻し，みな窓に近づいてカーテンの隙間から外を見ました。私たちの職場の敷地内に内務省が逮捕用に使う「Ｍピックアップ」という車が２台止まっていました。私たちの職場の３人を先頭車に乗せているのが見えました。後続車には通信所に勤務する人や郵便局に勤務する人が乗っているのが見えました。そうして車は動き出し，夜の暗やみに見えなくなりました。

数日後，新しい班長が来ました。彼は「私たちの中に反革命派が入り込んでいた。あなたたちは不注意だったため，わからずにいたのである。今後は警戒を厳重にしなければならない！」と偉そうな顔で言ったのでした。しかし，数日後にその新しい班長自身が逮捕されて行ってしまいました。このようにまったく平穏がありませんでした。こうした逮捕には軍人が深く関わっていましたよ。1937年９月から1939年４月まで軍人の逮捕が続いていました。逮捕の文書には必ずKh.チョイバルサン内務大臣が署名していました。ごくまれに副大臣の署名もあります。

わが家は劇場の近くにありました。劇場の西側数歩先に内務省がありましたよ。当時，人びとを逮捕するのはたいてい夜でしたね。ときおり昼間の逮捕もありました。私は内務省が逮捕した人びとを連れて来るのを何度も見たものです。大きなトラックに緑色の覆いをかけて，荷台の４隅に４人が鉄砲を持って座っていました。こういう車に逮捕した人びとを乗せて来て，内務省の敷地内に入れていました。こんなふうに内務省に人びとを入れるところは何度も見ましたが，出すところは１度も見ませんでした。彼らを夜のあいだにどこかへ連れて行って銃殺していたのでしょう。ときどき逮捕された人びとを並ばせて，鉄砲を持った見張りたちが追い立てていることもありました。彼らは内務省の敷地内に入らない，すなわち処刑するだけの罪のなかった人たちです。

ある時，私はそのように歩かされている人たちと出くわして，そのなかに同僚だったD.ヤダムスレンを発見しました。彼は私に気づきませんでしたが，私は気づきました。彼はなんとか処刑されずにすむようでした。すっかり変わり果てた姿でした。彼のその時の姿かたちを私は今まで忘れることができません。目に焼きついているのです。

当時はとてもおかしなことがたくさんあったものです。よく話されていた例を１つ話しましょうかね。セレンゲ県で内務省の代表としてZ.ドルジという人が働いていました。内務省は彼にトラック２台を与えて「さあ，君は行って反革命派を逮捕して来い！必ず２台が一杯になるようにしなければならないぞ！」と命令を与えました。Z.ドルジは北へ行き，ブリヤート族が大勢住むところへ着きました。道中にいた人びとを

１人残さず逮捕して車に乗せて行きました。数日間こうして逮捕しましたが，車２台は一杯にならなかったそうです。ほかに逮捕する人がまったく残っていませんでした。こうして内務省に戻って来ると内務省側は「君には２台の車一杯の反革命派を逮捕しろ！と命じたはずだ。君はなぜ命令を遂行しなかったのか？」と聞きました。Z.ドルジはとても横柄な性格の人だったのでした。彼は「反革命派でありそうな者はみな逮捕しました。もう逮捕する者は残っていませんよ！」と答えました。命令を遂行できない彼に対して上司は怒りました。そして，Z.ドルジ自身が逮捕されて，自分の逮捕した人たちと一緒にウランバートルに連れて来られて３日後に処刑されたそうだ，という話です。この話は少し誇張されているかもしれませんが，真実にかなり近い話ではあります。

当時，内務省は反革命派を逮捕する計画を立てていました。内務省の各捜査官が１日に処分すべき件数も決まっていました。その計画にしたがって，たとえば１日に５人とか処刑しなければならなかったのです。１人の捜査官が，ですよ。そこには多くの捜査官が勤務していましたからね。本来なら，逮捕されて来た１人１人について真偽を調査しなければなりません。言い換えれば，反革命派であるかどうかを確定しなければならないものです。しかし，当時はひとたび逮捕されれば「反革命派である！」と判断していました。人びとを当時はどういう根拠で逮捕していたのでしょうか？たいてい何の理由もなく，ただ反革命であるという一般的な理由から逮捕されていたのでした。そんな理由で，誰をも逮捕したり，処刑したりすることができたのでした。捜査官の仕事は，逮捕された人びと本人に「私は反革命派です！反革命的なこんなあんなことをしました！」と偽証させることだったのです。こういう情報を捜査官たちは自分たちで作り上げ，逮捕者に署名させていました。偽造調書に署名しようとしない者は殴ったり，拷問にかけたりして，署名させていました。１日に大勢が逮捕されてやって来るでしょう。彼らを捜査官たちのあいだで配分します。全員を自分たちの創作した情報に署名させて処刑していました。捜査官たちが逮捕者に署名させることができないと，計画が遂行されません。一方，計画が遂行されれば，賞賛されます。多くの「反革命」事件をすばやく解決した人は「優秀な捜査官」と言われ，昇進していきます。ですから，自分のノルマを果たすため，彼らは実に努力しました。内務省の捜査官にとって逮捕人は「敵対分子，反革命派！」にほかならなかったのです。したがって，彼らを気の毒だとはおよそ思っていなかったのです！私の父もまさにこのようにして処刑されたのでしょう。

当時，いくつかの県では逮捕された人を収監するのに場所が足りなくなりました。そこで１つのゲルに全員を宿泊させました。入らなければ足で押し込んでいました。一晩で10〜20人が，あるいはそれより大勢が，圧死しました。生き残った人だけを翌日連れて行き，銃殺していました。家に入らない人は車から降ろさずにそのまま運んで行

き，銃殺していました。こんなことが各県で行われていたのですよ。当時こんなふうにして３万人が殺害されたという情報があります。ただし，この数字は正確ではありません。実際にはこれをはるかに上回る数字になるでしょう。モンゴル人民革命党は，この数字を秘密にしています。今日にいたるまで内務省の文書は完全には公開されていないのです。

## 6　通信士からパイロットへ

**ＩＬ：**通信学校でモールス通信技術者となったわけですね。その後，その仕事を続けてこられたのですか？

**ＢＮ：**いいえ。1939年５月に私は解雇されました。1938年に私の父が内務省に逮捕されたでしょう。それで私は「反革命の子ども！」という理由で解雇されたのです。当時，逮捕されて処刑された人の子弟はみな仕事を解雇されました。父親か母親が「反革命」であるとされれば，「国の仕事には就くべきでない！」とされていたのです。解雇されて故郷に戻り，家畜を放牧して暮らしていました。その当時，成人向けに文字を教える「グループ」というものが開催されていました。私はそうした「グループ」においてボランティアで仕事をし，成人たちに文字を教えるようになりました。一言で言えば「ボランティア教師」になったのです。

そうして教えているうちに９月に入ってわがトゥブ県の「教育課」から１通の文書が届きました。その文書は私をウランバートルの師範専門学校で学ぶことを許可するものでした。それで私は師範専門学校で勉強するために再びウランバートルに行きました。当時，師範専門学校は３年制でした。わが師範専門学校は当時有名な学校だったのですよ。師範専門学校にはたいへん有名な先生がたがいらっしゃいました。校長はJ.ツェデブという人でした。のちに国の高官に昇進した人です。国家小会議でも役職があったと思います。

私は師範専門学校の学生だった時に初めてY.ツェデンバル長官を見ました。彼はソ連の学校を卒業して帰国し，財政専門学校の教務主任に任命されていました。J.ツェデブ校長とはとても仲が良かったのです。Y.ツェデンバルは若い時は好青年でしたよ。師範専門学校にしょっちゅう来ていました。そして来ればたいていJ.ツェデブ校長と会っていました。財政専門学校の校長はS.ロブサン氏でした。私は師範専門学校を３年で卒業しました。そして文部省の決定によりヘンティー県の中心地にある小学校の教師に任命されました。そこで1940年から1941年にかけて１年間勤務しました。

1941年６月に独ソ戦争が始まりましたよね。それで私は自分の故郷であるトゥブ県で教えたいと要望書を文部省に提出しました。わが県のセルゲレン郡に1940年に小学校が開校されていました。文部省は私の要望書を受理して，故郷への移住を許可しまし

た。それで私は1941年からセルゲレン郡の小学校教師となりました。私は18歳の時ヘンティー県に行き，19歳になってセルゲレン郡に戻って来たのです。わがセルゲレン郡の小学校はゲル２つに収まるほどの規模でした。

当時，セルゲレン郡の中心地はタスギーン峠の北のガンツ・ホタグ（たった１つの井戸）というところにありました。私は２月まで教師をしていました。ところが，２月に選挙が行われました。そして，私はセルゲレン郡の役所のトップ，つまり郡長に選ばれてしまったのです。こうして私は20歳の時に郡長になってしまいました。郡長就任後まもなく，初めてKh.チョイバルサン元帥と会いました。彼は仕事で私たちの郡にやって来たのでした。Kh.チョイバルサン元帥は私に対して多くを尋ねませんでした。どんな学校を卒業したのか？何歳か？といったことだけを質しました。私は郡長の仕事は長くはしませんでした。当時，全国規模で新しい学校が多数設立され，教員が不足していました。一部の郡では，郡長に選ばれた若い教員を再度教員にする動きも出てきました。

私はしかし，教員には戻りませんでした。1942年６月，私は「航空学校」に入学させられたのです。その当時，戦時のための速成パイロット養成が始まったのです。パイロット５人とエンジニア15人を養成する臨時学校がウランバートルに開校されたのでした。その学校で私は１年間学んで卒業しました。戦線に送り込む目的でわが航空戦隊はヘンティー県に集められました。そこには，連隊司令部や師団司令部の人たちが来ていました。わが第１航空戦隊はIL－２型という飛行機を操縦していました。私たちはその飛行機で出撃すべく準備をすることになりました。

ソビエト空軍将軍I.V.ザイサノフの命令が下り，わが航空戦隊はソ連の空軍と共に出撃することになったのです。わが航空戦隊の上級パイロットたちにいつでも出撃可能な状態にしておくように命令が下りました。私たちは毎日パラシュートを背負い，合図が出るのを飛行機の中で待機していました。ところが，わが航空戦隊には出撃命令が出ませんでした。それでも，２～３度偵察飛行を行いました。私たちが戦争でしたのはたったそれだけでした。そうして終戦となりました。私は1942年から1948年まで空軍で上級パイロット，航空戦隊政治局副局長などの職を務めました。

## 7　地方での幹部の仕事

**ＢＮ：**その後，1948年に国防省政治局の決定により「党幹部学校」に入学しました。そこで３年間学び，1951年にその学校を卒業しました。1951年から52年まではモンゴル人民革命党中央委員会に勤務しました。1952年から1956年にかけてはウランバートル市のモンゴル人民革命党イデオロギー課長や書記を務めました。1956年からはウムヌゴビ県のモンゴル人民革命党第１書記を務めました。

当時，モンゴル人民革命党の県委員会はもっぱら産業部門の仕事をしていましたよ。党の機関は産業部門のあらゆることに介入していました。それを指導するのが主たる仕事と考えていました。県委員会での私の主たる仕事はすべてをネグデル化することでした。家畜を私有していた牧民の家畜を社会のものとし，ネグデルという組織を作り，その新しいネグデルにメンバーを加入させ，ネグデルのメンバーによってネグデルの家畜を飼わせるという仕事でした。牧民の家畜を徴収するためにまず牧民たちが何頭の家畜を所有すべきかを算定しました。そして，それよりも多い分の家畜を徴収したのです。家畜を徴収された人びとはネグデルのメンバーとなり，ネグデルの家畜を飼うようになります。この仕事は気分の良いものではありませんでした。ある種の「粛清」であり，「偏向」となっていたのでした。

ネグデルに加入する以前，わが国の牧民は数多くの家畜を所有していました。牧民は家畜だけで生計を立てていました。彼らの生活の源泉は家畜だったのです。「ネグデル化運動」が盛んになったことですべての人がネグデルに加入させられました。１人残らずに，です。ネグデルに加入することを拒否した人びとも大勢いました。そういう人たちに対してはさまざまな圧力や強制をして，力づくで加入させたのでした。それゆえにモンゴルの農牧業は大危機に陥ったのです。強制的に徴収した家畜を放牧する人手が得られなくなったのです。ネグデルに加入した人びとに強制的に家畜を配分し，放牧をさせていましたよ。

牧民はネグデルの家畜を「罪のある家畜」と呼ぶようになりました。なぜなら，牧民たちにはネグデルの家畜を１頭たりとも利用する権利がなかったからです。ネグデルの家畜から採れる肉や乳，皮といった畜産物を利用する権利が牧民には無かったのです。ネグデルの家畜から採れる毛はすべてネグデルに納めなければならなかったのです。ネグデルの家畜を勝手に使い込み，肉や乳のノルマが達成できない場合は，牧民が牢屋に入るはめになったのです。牧民は家畜を飼育するだけで，自分たちには何のメリットも無くなってしまいました。

モンゴルの牧民は，自分の生活に使うために家畜を飼育するのです。ネグデルの羊を放牧した人には給料が支払われなければなりませんでした。ところが，家畜を放牧した人に給料が期日通りに支払われたことは１度もありませんでした。それに給料はとても少なく支払われるのです。ネグデルの500頭の羊を放牧した人は，月に８トゥグルグの給料をもらっていました。こんなふうだったので牧民たちの多くは非常に短期間のうちに貧しくなりました。そして牧民の多くが地方から出てウランバートルなどの定住地域へと移動するようになってしまいました。

こうした状況は今現在も続いているのです。今，都会に移住する人が大いに増加していますが，こうした動きはあの時から始まったのです。当時の影響が未だに収まらないということです。人びとは時代が変わると「昔のように生活するのは厳しくなって貧し

くなりそうだ！」と考えて都会へと向かうのです。今はどんな時代になりつつあるかを理解することなく，こうした状況が引き起こされるのです。ネグデル化以前のような時代に戻りつつあるのかどうかということは今の時点では分かりません。ネグデルができてから人びとの性格は大きく変わりました。誠実さや公正さが失われ始めました。人びとはまじめに働くのをやめ，自分の労働の成果というものを考えなくなりました。ありとあらゆることに対して不誠実な対応をする傾向が蔓延するようになりました。ネグデルの家畜を横領して「その家畜は死んだ！」と言うようになりました。乳を個人的に使い込んではまた別の言い訳をするようになりました。牧民たちはたいへんだったのですよ。すべてのノルマや計画を達成できなければ罰金を払わなければならなくなったのですから。もし家畜を死なせればまた罰金を払わなければならなかったのですから。

ネグデルの家畜を死なせた場合，その代わりとして同じような家畜を供出しなければなりませんでした。ところが，牧民自身の私有家畜がなくなってしまったのです。死んだネグデルの家畜の代わりに自分の家畜を常に供出していたために家畜がなくなってしまったのです。ネグデルのメンバーの私有家畜の頭数をゴビ地域では75頭，ハンガイ地域では50頭というように決めていました。ネグデルのメンバーの家畜頭数を「ネグデル構成員模範規則」で調整していました。それは法ではなく規則でした。しかし，あたかも法であるかのように厳しく遵守させていました。

1990年になるとモンゴルの牧民たちはみな乞食になってしまっていました。気がつくとみなが乞食になっていました。牧民はみなネグデルに，ネグデルは国に，国は外国に，負債を抱えていました。1990年までこのようでした。当時の状況はこんな感じでした。国民は非常に厳しい条件の下で，働き，暮らしていました。実のところ，すべてをソ連に依存していました。まさに従属国のようでした。わが国はソ連の「従属国」であるとは公式に言われていません。けれども，本当にそのような状態だったのです。すべてのものをソ連の様式で作っていました。あらゆるものについてロシアをまねて作っていました。

Y.ツェデンバルはロシア人の妻を持つ人です。そうした状況が彼の政策に強く影響していた可能性はあります。彼はただひたすらソ連とモンゴルの友好についてのみ話すのが好きな人でしたよ。この友好を守るためにすべてをささげました。最後には自分の役職を守ることだけを考えるようになりました。「私は解任されるのではないか」と周囲の人びとを疑うようになったのです。そんな状況に陥ったのです。ツェデンバル自身の置かれた状況もたいへん厳しいものとなりました。

50年代末，60年代初め，私たちは一緒に働いていました。Y.ツェデンバルの力が目に見えて急に落ちていたのです。ごく普通のことすらもわからず，仕事についてもまったくわけが分からなくなったようでした。私たちは「Y.ツェデンバルはどうしてあんなに容易に衰え，仕事の能力が落ちたのだろうか？」と思うようになったものですよ。

私はモンゴル人民革命党ウムヌゴビ県委員会の第１書記を務めていました。何ヶ月か地方にいてウランバートルに帰って来るという生活をしていました。私たちがいないあいだに彼は急に衰えたようでした。何日か前に話したり，同意したことをまったく心に留める様子もなかったり，そのまま放置してしまったりしていることがよくありました。仕事がまったく進まなくなったのです。

そんな状況がずっと続いて1984年に彼を解任したのです。他に方法はまったくありませんでした。モンゴル人民革命党中央委員会政治局は彼をどうすべきか？という問題についてかなり長いあいだ考えたのです。当時，人民革命党中央委員会政治局のメンバー全員がY.ツェデンバルの支持によって政府高官になった人たちでした。だから彼らは，Y.ツェデンバルに対して性急で誤った判断を下さないよう細心の注意を払っていたのです。彼らはツェデンバルに対して非常に忍耐強く，たいへん辛抱強く接しました。悲しいかな，ツェデンバルはまったく変わりませんでした。それで，人民革命党中央委員会政治局の局員たちは，党を40年以上にわたって指導してきたリーダーを解任する決定を下したのです。

## 8　チョイバルサンからツェデンバルへ

**ＢＮ：**ソ連の大学を卒業してきたY.ツェデンバルは財政専門学校の教務主任，大蔵省副大臣，モンゴル銀行総裁などの高い役職を任されてきました。当時，モンゴル人民革命党中央委員会にはS.ロブサンシャラブやT.エルデブオチル，L.バーサンジャブら書記たちがいました。エルデブオチルはモンゴル人民革命党中央委員会の委員長でした。彼は1938年に病気のため亡くなりました。その後，S.ロブサンシャラブがモンゴル人民革命党中央委員会でもっぱら主導権を握っていました。そのあとを継いだのがバーサンジャブでした。

1939年７月に開催された人民革命党中央委員会の総会において，モンゴル人民革命党ウムヌゴビ県の委員会の第１書記のD.ダムバ氏がモンゴル人民革命党中央委員会の書記に選出されました。ダムバ氏は1939年７月８日から新しい職務に就きました。ダムバ氏が中央委員会書記に就任したのち，７月10日，内務省は，ロブサンシャラブ人民革命党中央委員会書記とドグソム国家小会議議長，ロソル国家小会議副議長らを逮捕しました。ドグソム国家小会議議長，ロソル国家小会議副議長はD.スフバートルと共に1921年の人民革命を勝利に導いたわが国の有名な革命家であり，愛国者ですよ。1940年２月にモンゴル人民革命党中央委員会の書記であったバーサンジャブも逮捕されました。

バーサンジャブが逮捕された時，ダムバ氏を逮捕しようとする動きもありました。内務省がダムバ氏を呼び出したのです。ダムバ氏に「内務省へKh.チョイバルサンが呼ん

でいる！」という内容の「告知文」が届いたのでした。ダムバ氏はその「告知文」を受け取り，「ああ，これで逮捕される！」と思ったのだそうです。それで，内務省に行き，チョイバルサンの執務室に入りました。そこにはS. ジャンバルドルジ内務省副大臣とD. サムボーニャム逮捕局長の２人がいました。S. ジャンバルドルジは「政治的粛清」で名を馳せた人です。非常に多くの人びとを逮捕して「政治犯」の罪を着せ，粛清した人です。２人は，高い役職にある人たちをまさにこのようにチョイバルサンの執務室に呼び出しては逮捕していたのです。ダムバ氏は「まちがいなく逮捕されることになった！」と思って座っていました。ダムバ氏が入るとチョイバルサンは挨拶もしなかったそうです。ダムバ氏を直視することもなかったそうです。そしてチョイバルサンは「奴を部屋に入れろ！」と命じていたそうです。するとD. サムボーニャムは部屋を出て行きました。まもなく頭の上からデールを被った１人の「囚人」を先に歩かせ，サムボーニャムが部屋に入ってきました。そして「そのデールを下ろせ！」とその人に命じました。すると，髭茫々の，痩せこけた，苦悩に満ちた人の顔が現れました。ダムバ氏は最初，それが誰であるか分からなかったそうです。やがて「モンゴル人民革命党中央委員会書記のバーサンジャブだ！」と分かったそうです。そしてKh. チョイバルサンが席を立って近づいてバーサンジャブに対して「さて，お前はこのダムバについてどんな証言をしていたかね？それをもう１度言いたまえ！」と言ったそうです。ところがバーサンジャブは「私は何も悪いことはしていない。内務省のこの職員たちが私を殴り，苦しめたので私は耐えられなくなくなったのだ。それでダムバは私の共犯者だと言ったのだ。ダムバはまったくの無実だ。私も過ちは犯していない。私のした証言はすべて嘘であり，作り話だ。内務省の職員たちが私を誹謗するのだ。私はまじめに仕事をしてきた。私が犯した罪などない。私の身体は今とても病んでいる。奴らは私を殺す気だ。私を許し，ここから釈放してくれ！」と言っていたそうです。

するとチョイバルサンは「お前のその話は本当なんだろうね？」と聞いたそうです。「本当だ。本当だとも。ダムバは何も悪いことはしていない人間だ！」とバーサンジャブは答えていたそうです。そうしてKh. チョイバルサンは「こいつを連れ出せ！」と言ったそうです。そうしてバーサンジャブは外に連れ出されました。彼が連れ出されたあと，チョイバルサンは「バーサンジャブは証言の中でお前を自分の共犯者だと言った。ところがそれは嘘の証言のようだ。分かった。お前は下がって良い！」と言ったそうです。それでダムバ氏は逮捕されずに済んだのだそうです。

ダムバ氏はたいへん頭が良く，また国民の生活を良く知っていて，記憶力の良い人でした。軍隊に長年勤務した人ですよ。しかし，ロシアの学校を卒業していない人です。それどころか，彼はモンゴルの学校すら１度も通ったことのない人でした。すべてを自分の才能によって独学で学んだのでした。

1940年，モンゴル人民革命党第10回党大会が開催された際，中央委員会にはダムバ

氏以外の書記はいませんでした。その大会の準備はKh.チョイバルサンとダムバ氏の2人が行いました。その大会でY.ツェデンバルは「モンゴルの畜産業とその発展の見通し」という演題で演説し，討議をしました。そのようなテーマで演説をするようにとチョイバルサンが命じたのでした。その大会でY.ツェデンバルはモンゴル人民革命党中央委員会の書記長に選出されました。

当時，Y.ツェデンバルは24歳の青年でした。モンゴル人民革命党中央員会の第2書記としてCh.スレンジャブ氏が選ばれました。Ch.スレンジャブとY.ツェデンバルはこうしてモンゴル人民革命党中央委員会に同時に参入して来たのです。その後，少し経ってからニャンタイスレンギーン・ラムスレンがモンゴル人民革命党中央委員会の書記に選ばれました。モンゴル人民革命党第10回党大会でダムバ氏は同党ウランバートル市の委員会の書記に選ばれました。その後，1943年に彼は再びモンゴル人民革命党中央委員会の書記に選出されたのでした。その後はモンゴル人民革命党中央委員会を出ることはありませんでした。

1953年にKh.チョイバルサン元帥が死去した時，ダムバ氏はモンゴル人民革命党中央委員会の書記で，S.スレンジャブ氏は閣僚会議副議長になっていました。1954年にダムバ氏はモンゴル人民革命党の書記長に選出されました。

Kh.チョイバルサンの死後，彼に代わる閣僚会議議長が長いあいだ任命されませんでした。当時の国内ではチョイバルサンの代わりに「Ch.スレンジャブが閣僚会議議長になる！」という気運がありました。Ch.スレンジャブは長年Kh.チョイバルサンの代理を務め，かなり経験を積んでいた人でしたから。国民のあいだでも彼の評判は悪くありませんでした。国民の気持ちはこのようだったのです。そうしてまもなく閣僚会議議長となる人の名前が明らかになるはずでした。ところが，この問題は大混乱と陰謀の末に決着を見ることになりました。その当時に起こったできごとを私はこの目で見て，この耳で聞き，そしてまたいくつかのできごとに関わってきました。私は当時，モンゴル人民革命党中央委員会書記D.ソソルボラムの秘書をしていたのですよ。モンゴル人民革命党中央委員会政治局のメンバーが何日か続けて会議を開きました。私は会議が開かれていることは分かっていましたが，どんなことが議題になっているかは分かりませんでした。私は少し不思議に思っていました。時には深夜になっても会議が終わらず継続していたからです。

そして何日かして，N.ラムスレン氏と私の上司であるソソルボラムが一緒に部屋にこもって何かをするようになりました。彼らが何をしているか私は分かりませんでした。はたから見ると非常に重要な仕事をしているようでした。D.ソソルボラム氏は「今日は外からの訪問者とは面会しない。仕事があるのだ！」と命ずるようになりました。彼らは時どき私をモンゴル人民革命党中央委員会の公文書館に行かせるようになりました。モンゴル人民革命党中央委員会の公文書館から主として同党中央委員会の総会に関

する資料を請求していました。また，モンゴル人民革命党中央委員会の図書館からは古い新聞を借りていました。彼らが借りていた新聞にはもっぱら社会主義国の国権を握っていた労働党の中で起きた内部対立についての記事が掲載されていました。また，政治的過ちを犯して解任された，党指導者の何人かについての記事が載っていました。そうしたわけの分からないことが起きていました。そのころ，私のようにモンゴル人民革命党中央委員会書記の秘書をしていたある人が「モンゴル人民革命党政治局のメンバーは首相問題について話し合っているようだ！」と言っていました。

そうした状態が何日か続いた末，N.ラムスレン氏とD.ソソルボラム氏はある日「モンゴル人民革命党中央委員会のロシア語タイピストを呼んで来い！タイプライターも私の部屋に持ってくるように！」と私に命じました。私はD.ソソルボラム氏の言いつけをすぐさま実行しました。N.ラムスレン氏とD.ソソルボラム氏はロシア語タイピストと共に部屋にこもり，何かを書き始めました。彼らは長いことそうしていたと思います。そうしてD.ソソルボラム氏は部屋から出て来ると「ロシア語タイピストを送ってやれ！」と私に命じました。私はそのタイプライターを持ってタイピストを部屋まで送りました。私が戻って来た時，D.ソソルボラム氏とN.ラムスレン氏はY.ツェデンバルの執務室に行きました。行くまえにかなりの分量の下書きを私に渡して「さあ，この紙を１枚ずつ燃やせ！」と命じました。私はそれらの紙を鉄の容器に１枚１枚入れて燃やし始めました。燃やすあいだに読めるものは読んでみました。すべてロシア語で書かれていました。Ch.スレンジャブ氏のことばかり書かれたものでした。こうしてモンゴル人民革命党中央委員会の政治局会議においてCh.スレンジャブ氏に関する協議が行われていたことを私は知ったのです。「Ch.スレンジャブ氏を解任する準備をしているのだ！」という推測が浮かびました。

その翌日，仕事が終わる直前にダムバ氏は自分の秘書のM.ペルジェーに「明日10時にモンゴル人民革命党政治局の会議がある。局員に今から知らせろ！会議はY.ツェデンバルの部屋で行う。だが，Ch.スレンジャブに知らせる必要はない。彼には私が直接言う！」と命じたそうです。M.ペルジェーと私はとても仲の良い友人でした。翌朝，ちょうど10時にモンゴル人民革命党政治局会議がY.ツェデンバルの執務室で始まりました。会議は始まりましたが，政治局員の１人であるCh.スレンジャブを会議に出席させませんでした。Ch.スレンジャブ氏は会議が行われている部屋のドアに続く待合室で座っていました。彼と一緒にダムディンギーン・バター内務大臣が座っていました。D.バターも会議に出席させませんでした。彼もまたCh．スレンジャブ氏のとなりに黙って座っていました。

会議が始まってまもなく，D.バターが呼び出され，入りました。ほどなくバターは青ざめた顔で出て来て，黙って去って行きました。彼は内務大臣の職を解かれたのでした。そしてまもなくしてCh.スレンジャブ氏が会議の開かれている部屋に呼ばれまし

た。Ch.スレンジャブ氏はほどなく部屋から出て来ました。私たちは「Ch.スレンジャブ氏は解任された！」と思っていました。しかし，解任されたのではありませんでした。閣僚会議議長の職を辞職させられたのでした。

Ch.スレンジャブ氏自身にも首相になりたいという気持ちはあったようです。また，モンゴル人民革命党政治局の局員の中にはそれを支持する人もいたようです。しかし，Y.ツェデンバルはそれを「政権を奪おうとした！」と非難したのです。モンゴル人民革命党の他の書記たちはY.ツェデンバルの側に入り，Ch.スレンジャブを非難したようです。Y.ツェデンバルは「Ch.スレンジャブは閣僚会議議長には相応しくない非常に個人的欠陥のある人物だ！」と批判したようです。Ch.スレンジャブ氏はそれに対して結論を出し，Y.ツェデンバルの言った「個人的欠陥」を認め，さっさと負けを認めてやりました。こうしてCh.スレンジャブ氏は閣僚会議議長になることを辞退したのでした。

その当時，モンゴル人民革命党中央委員会の書記たちの私事についてはすべてD.ソソルボラム氏が担当していました。会議後，D.ソソルボラム上司は書類を私に渡し，「これをCh.スレンジャブ関連資料のファイルに入れておきなさい！」と言いました。私はその書類を読もうとしましたが，D.ソソルボラム上司がいたので読むことができませんでした。そうしてことは過ぎ去りました。

Y.ツェデンバルはこうして初めて閣僚会議議長となる道を整えたのでした。このような陰謀によって，閣僚会議議長という役職が自分の方に巡ってくるように仕向けたのです。「Y.ツェデンバルはモンゴルの国権を40年間支配した」と書かれますよね。実のところ，そうではないのです。1940年に彼はモンゴル人民革命党の書記長になりましたが，Kh.チョイバルサンが閣僚会議議長をしていました。つまり，Y.ツェデンバルは国政には関わらず，党の仕事だけをしていたのです。1954年にY.ツェデンバルは閣僚会議議長に任命されました。そのため，モンゴル人民革命党の書記長にはダムバ氏が選ばれました。ダムバ氏は1958年まで書記長を務めました。ダムバ氏はモンゴル人民革命党の書記長になってから，Y.ツェデンバルの手を借りずに党の仕事を１人でやっていました。ダムバ氏はものすごくやり手だったのですよ。彼はモンゴル人民革命党書記長時代，仕事をとても立派にやっていました。すべての業務を統括し，方針を決める能力がありました。

## 9　個人崇拝をめぐって

**ＢＮ：**1956年にソ連共産党の第20回大会が開催されました。ソ連共産党第20回大会にはY.ツェデンバルとダムバ，そしてD.トゥムルオチルがモンゴル人民革命党を代表して出席しました。その会議で初めて「個人崇拝」の弊害について議論されたのでした。

つまり，I.V.スターリン崇拝，法の逸脱，数千の無実の人びとを「政治犯」として処刑したことについての批判が行われたのです。ソ連共産党中央委員会書記長N.S.フルシチョフの提起したその議題をダムバ氏は大いに支持していました。「モンゴルにおいて個人崇拝を横行させ，政治犯として多数の人を粛清した人びとを摘発し，彼らに政治的責任を負わせなければならない！」とダムバ氏は考えていたのです。ダムバ氏はモンゴル人民革命党の書記長として，そうした政治的立場を固く貫き始めたのです。

この問題に関してY.ツェデンバルは「モンゴルでは政治的粛清はあったが，その規模はソ連ほどではなかった！」などと，個人崇拝の弊害をなるべく抑えようとしていたのです。一方，多くの人びとが「Y.ツェデンバル自身，Kh.チョイバルサンと長年共に働いてきた人間であるがゆえに，モンゴルで起きた個人崇拝の責任をY.ツェデンバルもまた負うべきである！大勢を政治犯として処刑した責任を回避してはならない！」と考えていました。ダムバは個人崇拝の弊害をモンゴル人民革命党中央委員会総会で徹底的に議論する考えだったようです。ところが，それを議論する段階になってY.ツェデンバルが妨害し，何らかの手立てを講じて先延ばししたのでした。ツェデンバルはチョイバルサンをかばっていました。ツェデンバルにとってチョイバルサンを守るということは実のところ自己防衛を意味していました。

当時，モンゴル人民革命党中央委員会の政治局の局員には，ダムバ氏の立場を支持する人がたくさんいました。D.トゥムルオチルもまた「個人崇拝の弊害を明らかにし，それを煽っていた人びとに対して政治的責任を追及すべきだ！」と見ていました。しかしながら，Y.ツェデンバルは徐々に自分の足場を固めていきました。Y.ツェデンバルはそうした厳しい状況から抜け出す突破口をたゆみなく探し続けた末，とうとうダムバをモンゴル人民革命党中央委員会の書記長の職から解任することに決めました。ダムバは党書記長として非常にうまく党を運営していました。私は当時，人民革命党ウムヌゴビ県の委員会の第1書記をしており，ダムバ上司の指導の下で働いていたので，彼のことはよく知っていたのです。

Y.ツェデンバルは，誰かを解任する時はいつもなんらかの言い訳を見つけてきては事を大きくしていましたね。ダムバ氏はロシア語が話せませんでした。制度的な学校教育を受けたことがないという点で欠けている人でした。そうした彼の弱みをY.ツェデンバルはもてあそび始めました。Y.ツェデンバルはこの問題を「ダムバは思想や理論の面での武装が弱いので正しい基礎を保つことができない。単に実務に通じて奔走しているだけで，真の共産主義者に成りうる道理がない！」と断定したのです。

1958年11月に開催されたモンゴル人民革命党中央委員会の第2回総会においてダムバについての審議が突然行われました。総会は議題をすべて協議し終え，閉会するところでした。ところが，Y.ツェデンバルが突然，人民革命党中央委員会書記長からダムバを解任するという議題を提起したのです。すでにその議題は第2回総会の議題では

ありませんでしたので，総会のメンバーは協議を拒否しました。多くの人びとが「ダムバを解任する必要はない！」と考えていたのです。その会議の議事録を見れば一目瞭然です。ダムバの代わりにモンゴル人民革命党の書記として誰を選ぶのかということも非常に重要な問題でした。ところが，Y.ツェデンバルには，彼の代わりに自分が人民革命党書記長に選ばれるという目論見があったのでした。総会のメンバーは「Y.ツェデンバル自身は思想や理論の面で完全に武装した人間なのか？この大きな2つの役職を彼1人で兼務できるのか？することは山のようにある。われわれはとても大きな目標を掲げたではないか！」などと話していました。

私はその総会で「ダムバを異動させる根拠は明確ではない。われわれの仕事がうまくいっていないのは彼を異動させる根拠にはならない。悪いことの責任をY.ツェデンバルも共に負うべきだ。ダムバを異動させたところで良くなるわけではない。なぜ，こうした問題を事前に総会の議題項目に入れなかったのか？いかさまではないか？」と言いました。すると，ダムバ氏が自ら立ち上がって言いました。

「Y.ツェデンバルが国家の現況を判断して言った言葉だ。要請に応じて私はモンゴル人民革命党書記長の職を解任するよう希望した次第である。モンゴル人民革命党政治局は全会一致で決めたのだ！」というような意味のことを言ったのです。

モンゴル人民革命党政治局会議でダムバ氏は「モンゴル人民革命党書記長の職を他の人に譲ろう。こんなことが，国全体の状態が悪いことと一緒にされてはならない。私に非があることは認める。しかし，国の状態が良くないことの主たる責任を私は負わない。その責任はY.ツェデンバル自身も負うべきだ！」というようなことを言ったようです。こうして1958年11月に開催されたモンゴル人民革命党第2回総会においてY.ツェデンバルはモンゴル人民革命党書記長に再選されました。Y.ツェデンバルの圧力によってダムバ氏は降格され，モンゴル人民革命党中央委員会の第2書記となりました。

その後，1959年3月に開かれたモンゴル人民革命党中央委員会総会においてY.ツェデンバルはダムバ氏を完全に解任してしまいました。Y.ツェデンバルは，ダムバをこのようにしてモンゴルの政治の舞台から追放することで，「個人崇拝」を横行させて多くの無実の人を「政治犯」として処刑したことについての政治的責任から逃れる道を少しでも得たのでした。

Y.ツェデンバルはモンゴル革命青年同盟の中央委員会書記のマグサルとバルガンジャブといった人たちを自分の執務室に呼び入れて，内務省に逮捕させていたのでした。Y.ツェデンバルはこうして多くの人びとを「政治犯」と誹謗し，逮捕することに関わってきたのです。彼が直接的に関与して「政治犯」として内務省に逮捕された人の数は1,400人にのぼると言われています。彼らの多くが処刑されたのです。モンゴル人民革命党ウランバートル市委員長であったロブサンナワーン，閣僚会議副議長だったドルジ

プレブやジャムスランといった人びとはY.ツェデンバルが人民革命党中央委員会の書記長に就任してから逮捕された人たちです。ダムバ氏はY.ツェデンバルがそんなかたちで「政治的粛清」を拡大させていることをよく知っていたのです。「政治的粛清」で何千もの人が罪を着せられ処刑されましたが，そのことに対しての政治的責任はチョイバルサンが負わなければなりません。ただし，ツェデンバルがそうしたことに関わっていたこと，そしてそれを拡大させていたことも事実なのです。しかしながら，主たる責任はチョイバルサンが負うべきです。

ダムバ氏が守ってきた立場を人民革命党中央委員会の人びとが支持していました。そもそも，Y.ツェデンバルが「政治犯」として大勢を粛清していたからではなく，Y.ツェデンバル１人の手に権力が集中することに対して多くの人は警戒していたのです。ソ連を偏重する彼に権力が集中すれば，「国を危機的状態に陥れる！」と多くの人びとは警戒していたのでした。当時，Y.ツェデンバルの出した政治的決定の多くは「自国の国益の保護よりもソ連の国益を重視している」と多くの人びとが看取していました。ダムバ氏につづいてCh.スレンジャブ氏もまたモンゴル人民革命党中央委員会から追放されました。

## 10　知識人の迷妄をめぐって

**KY**：「知識人の迷妄」という名前で，モンゴルでは何が起こっていたのですか？

**BN**：Y.ツェデンバルが，モンゴルの知識人に敵対して行った排除を「知識人の迷妄」と呼びました。1950年代初頭から，言い換えればチョイバルサンが亡くなって以降，わが国の社会生活はたいへん不安定になってきました。国民は，国の発展，進歩や未来の運命を非常に心配し始めたのです。「1921年の人民革命以降，モンゴルは社会主義建設のためにソ連とだけ交流してきた。以来，20〜30年が過ぎた。国家経済も国民生活も向上していない。だから，今や他の国との関係を拡大すべきである。わが国は独自の内外政策を突き進めなければならない。ソ連以外の国と通商その他の関係を拡大させなければならない！」という意見がモンゴルの知識人の中で増えてきました。私は当時，モンゴル人民革命党ウランバートル市委員会の書記でした。このような意見は，一般市民から政府高官まですべての人びとにありました。

当時，メディアはモンゴル人民革命党の厳しい管理下にありましたから，このようなことについて一言も報道されませんでした。しかし，モンゴル社会全体が，このような批判的立場になっていたのです。人びとはこのような批判的意見を互いに話し合うだけでなく，「宣伝ちらし」のようなものを作って配るようになりました。私がモンゴル人民革命党ウランバートル市委員会に勤めていた時，党中央委員会統制委員会や内務省から常時「秘密指令」が来ていました。それは「誰かがY.ツェデンバルの政策やソビエ

トとモンゴルの友好を批判した秘密文書を大量に作成して社会に広めている。その秘密文書を作成した主を即刻発見せよ！」という命令でした。私たちは「秘密文書」を作成している人物をどのように見つけられるのかという問題に直面していました。「秘密文書」は手書きのモンゴル文字で書かれて配られていました。ですから筆跡鑑定が最も良い方法に思われました。私たちはすべての同僚の筆跡を調べるようになりました。こうして膨大な仕事になりました。けれども，これによって１人の「犯人」も見つけることはできませんでした。

その後も，Y.ツェデンバルとその政策批判，ソ連批判は収まることなく，いっそう拡大し，おおっぴらになっていきました。そのような時期，1956年，Y.ツェデンバルはモンゴル人民革命党ウランバートル市委員会第１書記であったD.ダムディン氏を呼び，「ウランバートル市には，ソ連との友好関係について不健全な見解が広まっている。このような意見を止めるために党ウランバートル市委員会は対策を講じていない。今から強力な策を講じて，このような意見を差し止めなければならない！」と任務を課したのです。

D.ダムディン氏はY.ツェデンバルと会って戻って来ると，私を部屋に呼びました。私は党ウランバートル市委員会のイデオロギー担当書記でしたから，主たる担当者になっていたのです。２人で相談しました。「まず，党ウランバートル市委員会の幹部を全員呼んで，Y.ツェデンバルとソ連についての批判的発言を抑え，発言者をつきとめるための通達を行わなければなるまい。また情報宣伝担当者会議を開かなければならない！」と取り決めました。私たち２人はこの任務を迅速に実施しました。しかし，すでに社会に広がってしまったこれらの意見を止めることなどできませんでした。

このような時期に，モンゴル人民革命党中央委員会政治局員たちが，省庁，国営大企業，労働者組合中央評議会，革命青年同盟中央委員会，モンゴル国立大学などに派遣されました。派遣された中には，ダムバ氏，B.シレンデブ，L.ツェンド，D.トゥムルオチル，J.サムダンらがいました。彼らはそれぞれ派遣先で集会を組織します。そして「Y.ツェデンバルとソ連について不健全な悪意ある発言がウランバートルで横行している。われわれはそのような発言をする者を責めて罰するために来たのではない。ソ連との友好関係についての意見や批判を聞いて，今後の業務の参考にし，過ちを正す目的で来た！だから，みな自分の考えを私たちに率直に話すべきである！」と言ったのです。人びとも彼らの言葉と来訪目的を信用しました。

概して，当時は党中央委員会の幹部が一般の人びとと会合を持つことなどほとんどありませんでした。ですから，人びとはこの機会を利用して，自分の考えを自由に述べることを望みました。人びとは「党や政府の幹部がわれわれの意見を聞きに来た！」と喜んで迎えたのです。集会では人びとがモンゴルとソビエトの関係にあるすべての悪いことを列挙しました。

「ソビエト側はモンゴル側の意見や提案をまったく受け入れない，ただ自分の意見を押しつけるだけである」「ソビエトは対外貿易で特権を享受している」「品質の悪い製品を売っている」「わが国の製品の価格が安く抑えられている」などと人びとは発言しました。「わが国政府は，これらすべてを知っているのに，それを改善しようとしない。それどころか，それが普通のことであるかのように国民に理解させようとしているようである。これは結局，Y.ツェデンバルの所業に関係する。モンゴルとソビエトの友好という言葉で飾って，これらのことをすべてますます煽っている」と人びとはY.ツェデンバルを批判しました。「モンゴルは独自の国内，国外政策を持つべきだ。今の内外の政策はソ連の管理下にある。われわれは独自に他の社会主義国と交流できるはずだ。さらに資本主義国とも貿易関係を結ぼう。南北の隣国とは対等な関係で協力しよう。どちらかを上と見て，一方を悪者としてはならない！」などと話していました。

モンゴルの新時代の知識人から出てきたこれらの意見は誤りでなく，それどころか指針にすべきすばらしい意見でした。党中央委員会政治局から派遣された職員は，人びととの会合の報告書をY.ツェデンバルに見せました。すると，Y.ツェデンバルはその報告書にもとづいて，知識人の排除に着手したのです。知識人の中にあったこれらの思想を「知識人の迷妄」と名づけたのです。

「私たちはソ連から多額の援助を受けている。ソ連はわが国のハルハ河戦争に多大な支援をし，自国の軍を派遣してわが国の領土を守ってくれた。戦死したソ連兵士の亡骸はモンゴル国領内に今もあるではないか。それなのに，ソ連に敵対する，ろくでもない発言をばらまいている。もしソ連と結んだ友好関係が弱まれば，他の資本主義国に支配されてしまう！」と，Y.ツェデンバルは反対の解説をしたのです。

そして，党中央委員会政治局の会議を招集して，モンゴルとソビエトの友好に批判的発言をした高官の問題を取り上げて解雇する業務を組織したのです。党ウランバートル市委員会のM.ダムディン第１書記が会議に参加しました。M.ダムディン氏は私を連れていきました。私の任務は，この会議に取り上げられる人びとについて報告することでした。朝始まった会議は夜中まで続きました。会議には党政治局局員だけでなく書記たちも参加しました。参加者は１日中黙っていて，１人話しているのはY.ツェデンバルだけでした。Y.ツェデンバルは会議に招集された人びとに激しい態度を見せ，大声で叱りとばしていました。最後に，革命青年同盟中央委員会のT.ジャムツ部長を呼ぶように私に命じました。ジャムツと私は党幹部学校の同窓でした。彼がなぜこの件に関わったのかは知りませんでした。私は夜中の３時に彼の家に行き，彼を会議の場に連れて来ました。Y.ツェデンバルがまた一方的に叱りつけ始めました。「君は反ソ連の思想だそうだな。ハルハ河には何千ものソビエト兵士の遺体が横たわっていることをよく知っているはずだ。わが国を守るために日本軍と戦って犠牲になったことを知っているだろう。それなのになぜソ連に反対するのか？私たちはソビエトから多大な援助を受け

ている。君は党の職員だったのに，なぜ党の政策に反対するのか？」などと言うのでした。T.ジャムツは黙って座っていました。そして会議は終わりました。

そうしてY.ツェデンバルは「状況は非常に良くないことになっている。主だった連中に制裁を加えなければたいへんなことになる。ろくでもないことを言いふらしている連中は叩かなければならない。モンゴル人民革命党中央委員会の特別決議を出さなければならない。決議案をB.シレンデブ，D.トゥムルオチル，S.サムダンの3人が作成せよ。すぐヌフトに行って決議案を作ってくるように！」と命令しました。

私は，その決議が出るまえにモンゴル人民革命党ウムヌゴビ県委員会第1書記に任命されました。私が地方に赴任してから決議が出て，大勢が解雇されました。この決議を完成させる業務に関わることをB.シレンデブ氏は躊躇したようです。

解任された人びとの中には，革命青年同盟中央委員会第1書記のM.ダンガースレン，T.ジャムツ，学者のTs.ダムディンスレン，ドルノド県委員会第1書記のZ.ソノムツェレン，モンゴル人民革命党付属党史研究所研究員のＪ.トゥムルバータル，D.ラムジャブ，経済学博士Sh.バトオチルなどが含まれていました。牢屋に入れられた人もいました。モンゴル人民革命党中央委員会から出された決議に彼らの名前は記されています。「知識人の迷妄」とはこのようなできごとを指しています。

ツェデンバルやモンゴル・ソビエトの友好関係に批判的であった多くの人びとは排除されましたが，国民のあいだで批判が語られることを止めることはできませんでした。それどころかそうした話はますます強くなり，続きました。ただし，語りかたは変わりました。そういう話を人前では話さず，家の中で，あるいは意見を同じくする人たちのあいだだけでこっそり話すようになったのです。こうした話は秘せられるようになったのでした。

Y.ツェデンバルは自分やソ連との友好を批判した人を，内務省を使って逮捕し始めました。ただちに人びとを解雇するようになりました。初めてY.ツェデンバルが政治の舞台に出てきた時，総じてモンゴル社会全体が嫌って反抗したのでした。Y.ツェデンバルは，自分に対する批判を自身で抑えつけようとしていました。

そのような時に，Ts.ローホーズがモンゴル人民革命党中央委員会総会の場で初めてY.ツェデンバルを批判したのです。Ts.ローホーズは「Y.ツェデンバルはあまりに自分勝手すぎる。何でも1人で決めている。国民から遠く離れている。国民の生活を知らない。国の経費で外国に行ってばかりいる。休暇でも外国に行く。ソビエトで起こっていることを猿まねしているだけである。独自の考えを持たない。共に働く政治局員はY.ツェデンバルの誤りを指摘して正すかわりに，彼を称賛して誤りをいっそう広げている！」と批判したのです。これは，1956年のモンゴル人民革命党中央委員会第2回総会での発言ですよ。当時，党書記であったダムバ氏はTs.ローホーズの批判を強く支持していました。

## 11　ツェデンバルの人となり

**B N：**Y.ツェデンバルは，人としてはとてもいい人でした。怒りっぽくない穏やかな人でした。1940年にモンゴル人民革命党中央委員会書記長になったあと，ツェデンバルは一時期，熱意を持って働いたことでしょう。当時は国民も彼を支持していたのです。しかし，次第に積極性が失われて，徐々に仕事ができなくなったのです。チョイバルサンの死後，明らかに彼の積極性や創造性が失われました。それは彼の近くで働いていた人には明らかだったのですが，一般の人びとにはまったくわかりませんでした。私はモンゴル人民革命党ウランバートル市委員会の職員でしたから，私たちにはよくわかっていました。

1954年，Y.ツェデンバルは38歳でした。もともと，鋭敏で知識や能力がある人ではなく，ものごとを理解するのに時間がかかる人でした。一言で言えば少し「鈍重な」人だったのです。それに比べれば，ダムバ氏は，まさに俊敏で頭の良いすばらしい人でした。Y.ツェデンバルは，ダムバ氏やチョイバルサンのかたわらでは影の薄い存在であったかもしれません。だから，チョイバルサンのあとで頭角をあらわしたのでしょう。Kh.チョイバルサンやダムバ氏がいなくなって，彼の欠点や悪い面がいっそうはっきり見えてきたのかもしれません。彼らのそばにいた時には彼の欠点が隠されてあからさまにはならなかったのかもしれません。

私はときどき会っていました。会議の場や相談する時にも会って，仕事について話す機会がありました。そして次第に「こんなに仕事のできない人間がモンゴル人民革命党書記長になってしまったのか！」と思うようになってきました。私は若いころ彼を崇拝していたのですよ。故郷の郡の牧民が「優良牧民会議」に参加しました。そして帰って来て「あのY.ツェデンバルという人は，汚い手で触れたり，汚れた目で見たりするのさえ畏れ多い，すばらしい若者だ！」と賞賛していたものです。それで私は「モンゴル人民の指導者」というのは仏のような人だと思っていたのでした。しかし，近くで働くようになり，とりわけ「知識人の迷妄」以来，私の彼についての考えは変わって来たのでした。これはどうもおかしいなと。

まさに近くで見てみると，非常に遅れた考え方を持ち，私利私欲があり，能力に欠け，妻に支配され，ソビエトに支配されてしまった人でした。考えていることは，自分の役職を最後まで守りたい，ソビエトに良い顔をしたい，ソビエトに従順であることを見せたいということでした。ソビエトに従順であることを見せるために，時どき，できるだけ多くの人びとを「民族主義者」という理由で解任し，追い出すことを考えるようになってしまったのです。国家の発展についての考えが彼の頭にあったかどうかはとても疑わしいかぎりです。

彼がソ連に留学している時，J.サムボー氏が彼をKh.チョイバルサンに紹介したよう

です。当時，J.サムボー氏は駐ソ連大使だったのです。そして，チョイバルサンが彼の政治キャリアの礎を築いたのでした。Y.ツェデンバルはソ連のイルクーツク市で財政専門学校を卒業しました。そのまえにブリヤートのウランウデ市の「ラブファク」を卒業しました。「ラブファク」とは，ソ連の大学に進学するためにモンゴル人がロシア語を勉強する予備校でした。

イルクーツクでは彼と一緒にニャンタイスレンギーン・ラムスレンが留学していました。N.ラムスレン氏はのちに，当時の興味深い思い出を語ってくれました。２人はとても仲が良かったそうです。卒業の１～２年前から，Y.ツェデンバルはとても変わったそうです。何か自分が不可侵の存在であるかのようにふるまうようになり，学校当局も彼を特別視するようになったそうです。ときどき消えていなくなるけれども彼がどこで何をしているか誰も知らないのです。そんなふうにいなくなっては，またあらわれるのだそうです。そして，その時には，とても良い服を着て，すばらしくおしゃれな格好をした人になっているのです。どこで何をしてくるのか誰にも言わず，一緒に学んでいた人たちもとうとう，それについて何も聞かなくなりました。ずっとあとになって「Y.ツェデンバルはあのころからソ連のKGBとつながりができた！そこから彼は金を受け取り，指令も受け取るようになった！」と説明する人も出てきました。これが事実だとすれば，チョイバルサンではなくKGBが彼をモンゴルの政治に引き入れたことになるでしょう。

Kh.チョイバルサンは当初，彼を財政専門学校の副校長に，続いてモンゴル銀行総裁，財務省副大臣に任命しました。彼のような若い人をそんなに早く高い地位につけるのはKh.チョイバルサンの手法ではないでしょう。当時のモンゴルには専門的人材が少なかったのです。30年代後半に「政治的粛清」によって多くの専門的人材を処刑し，牢獄送りにしたので人材が尽きていました。Y.ツェデンバルのように財政経済の専門家でロシア語をよく習得した若い人はごくまれだったのです。政府や党としても，Y.ツェデンバルのような人間は必要だったでしょう。その意味では，Y.ツェデンバルがさっさと出世したことは，それほど大きな誤りだったとは私は思いません。

当時，Y.ツェデンバル以外にも，B.シレンデブ，N.ラムスレン，Ch.スレンジャブなど数少ない人材がいました。これらの人びとがKh.チョイバルサン時代に彼のそばで働いていたのです。この中で，いったいチョイバルサンは誰に自分の任務を引き継ぐのか？という問題がありました。N.ラムスレンに期待していた人もいたと言います。一般の人びとは「Ch.スレンジャブが引き継ぐべきだ！」と思っていたことでしょう。まさか「Kh.チョイバルサンの後継者はY.ツェデンバルになる！」などという話はほとんどありませんでした。

Y.ツェデンバルとN.ラムスレンの２人は一時期とても仲が良かったのです。N.ラムスレン氏は初め，農牧業大臣に任命されました。次に，モンゴル人民革命党中央委員会

のイデオロギー担当書記に選出されました。一時期は外務大臣も務めていたのです。しかし，最後には，Y. ツェデンバルとN. ラムスレンの関係はかなり悪化しました。それで，Y. ツェデンバルはN. ラムスレンを解任して党政治局から追放したのです。この2人の仲違いはまったく個人的なことでした。その理由を当時の私はおぼろげながら気づいていました。N. ラムスレン氏の夫人は医学博士で，非常に優秀な人でした。またとても美人でした。名前はナムスライジャブと言いました。Y. ツェデンバルはナムスライジャブが気に入ったのかもしれません。ツェデンバルは彼女を放っておきませんでした。けれども，彼女はY. ツェデンバルの下品な考えを一顧だにしませんでした。けれども，Y. ツェデンバルは執着したのです。ついにナムスライジャブ夫人は堪忍袋の緒が切れました。彼女はY. ツェデンバルに相当厳しく言ったようです。そればかりでなく，党中央委員会政治局の何人かに訴えて，Y. ツェデンバルの下品な行為をやめさせようとしたのです。

ところが，これにはY. ツェデンバルもたいへん怒りました。そして「ナムスライジャブを党から追放しろ！仕事をくびにしろ！」と命令したのです。党除名の任務を，党ウランバートル市委員会のM. ダムディン委員長に下しました。ダムディン委員長は党ウランバートル市委員会の局員を集めました。R. ロブサンラブダン，B. ロブサンチョインボル，D. ダンガーらを集めました。局員として私も参加したのです。最初，私たちはこの会議で何が審議されるかを知りませんでした。会議の招集は，その日の仕事が終わったあとに突然なされたのです。

本来，局員会議は2日前に連絡が来るはずで，話し合う内容は事前に知らされている規則なのです。また審議した結果，出される決議案についても事前に配布されているはずでした。しかし，この時の会議は，何の準備もなく，いきなり始まりました。局員はダムディン委員長の執務室に着席していました。ダムディン委員長は私たちに何も言いません。全員が黙って座っていました。すると，ナムスライジャブが入って来て着席しました。私たちはみな驚きました。こうして会議が始まりました。ダムディン委員長が立ち上がって「それでは，会議を始めよう。モンゴル人民革命党中央委員会政治局から指令が来た。わが党委員会の今回の局員会議では，同志ナムスライジャブに関する問題を審議する。同志ナムスライジャブは，わが党指導者を言葉で侮辱した。わが党指導者について，嘘や妄言を広めて誹謗したのである。中央委員会の団結を破壊しようと画策した。このため，われわれはこの問題を取り上げて審議し，ナムスライジャブのこの行為をやめさせ，モンゴル人民革命党の隊列から追放しなければならない！」と言って座りました。私たちの中で声をあげる者はいませんでした。みな黙って座っていました。すると，ナムスライジャブ本人が立ち上がって発言したのです。

「あなたがたの誰とも話すつもりはありません。私は何度も繰り返されたできごとについて話すべき場所で真実を話しました。私はこのような状態にまったく耐えることが

できません。私はいかなる嘘も妄言も広めてはいません。誰も侮辱してはいません。誰のことも言葉で攻撃したり，貶めたりしていないのです。私は家庭を持っています。もし私を党から追放するなら追放するがいい。私は人民革命党の名のもとで過ちを犯していないから，私が容認する罪などありません。私には何の誤りもない！それよりも，教養のない，野蛮な，下品な指導者たちを追放したほうが，よほどあなたたちの名誉になるだろう！」と言って着席しました。

わがダムディン委員長は一言も発することができずに黙って座り込んでいました。そして「そうか，わかった。これで解散にする！」と言って私たちを帰したのです。この件はこうして終結しました。私はのちに，この件についてM.ダムディン委員長に尋ねました。彼はY.ツェデンバルから指令を受け取っていたことを明らかにしました。結局，Y.ツェデンバルはナムスライジャブを追放することはできませんでした。そして，今度は彼女の夫を排除する方法を探し始めたのです。

N.ラムスレンの父親は1920年代に一時期モンゴルに侵入して来たロシア白軍に所属していたという話があります。あるいは，Y.ツェデンバル自身が創作したのでしょうか？まったくわかりません。そして，「十月革命から逃げ出した白軍に所属していた人物の息子がモンゴル人民革命党の幹部であってはならない！」という理由で，N.ラムスレンをすべての役職から解任し，追放したのです。N.ラムスレンは，こうしてモンゴルの政治の舞台から降りました。彼が再び政界に戻ってくることはありませんでした。

ところで，1990年の民主化以降，モンゴルの新聞に何度かたいへん興味深いインタビューが掲載されたことがあります。彼はY.ツェデンバルと幼なじみだったことを具体的に話していました。また，ソ連で一緒に留学していた時の面白い思い出も語っていました。ラムスレンはもともと私の先生でした。党幹部学校で学んでいた時の先生なのです。そこではD.トゥムルオチル，S.ジャランアージャブも教えていました。またそこにはダムバ氏も時おりやって来て講演しました。ですから私はラムスレン氏とは古くからの知り合いなのです。彼は役職から引退してズーンハラーに住んでいました。1990年直前だったか，夏に１度偶然に出会ったことがありました。それで家に招待されました。私は出かけて行きました。奥様は亡くなって１人で生活していました。そして彼は私にとてもたくさん歴史について語ってくれました。当時，Y.ツェデンバルと仲違いしたことについても話してくれました。

そして「Y.ツェデンバルは，モンゴルをソ連に組み込んで，その一共和国にしようとしていたのだよ！」と言いました。彼はわが国の一部の知識人や政治家たちに命じてソ連への合併要請を出させていたのです。N.ラムスレン氏は，その最初の文書を私にくれました。Y.ツェデンバルの指令によって，わが国の知識人がその文書を作成して署名していました。彼らはソンギノ保養所に数日宿泊して，それを作成したのだそうです。私はその文書をじっくり読みました。その主旨は「レーニンによれば社会主義建設

にはまず重工業を発展させなければならない。しかるにわが国では重工業はまったく発展していない。ゆえに祖国に社会主義を完全に建設するために，ソ連邦の重工業に依拠して，ソ連邦の一構成員となれば，急速に社会主義建設が可能になる！」というものでした。そこには直接的に「モンゴルをソ連に組み込もう！」と書いてはありませんでした。そこにはたくさんの問題が触れられていました。その中には，例の「知識人の迷妄」の時期に語られた問題のいくつかが入っていました。具体的には「モンゴル国の急速な発展にはどうすべきか？」などの問題が触れられていました。N.ラムスレン氏はその文書を私にくれる時に「この文書は外見上，わが国の何人かの知識人が自分の意見を表明したように見えるだろう。しかし，この文書作成の命令はY.ツェデンバル自身が下したものだ。これは彼の本心なのだよ！Y.ツェデンバルは自身がロシア人の妻をもっている人だから，ソ連と合併するつもりだったのだろう！」と言いました。

Y.ツェデンバルはネグデル化運動を，1921年の革命に匹敵する大事業だと言っていました。実際には，この運動はモンゴルに何の利益もありませんでした。国民の生活にはまったく利のない，それどころか，いっそう生活を悪化させました。本来の目的は協同によって生活を向上させるはずでした。しかし，実際には反対でした。国民の生活は本当に低下していきました。ネグデルで働いて「労働英雄」になった人もいることはいます。が，非常にまれです。ほとんどの国民の生活は悪化しましたよ。経営のうまくいっていたネグデルもありました。が，たいへん少なかったのですよ。

## 12　中央委員会第 6 回総会

**ＩＬ：**あなたは1964年12月のモンゴル人民革命党中央委員会第 6 回総会で，対外負債が大きくなっていた問題について強く批判しましたね。この負債が増えていた理由について明らかにしていただけますか？

**ＢＮ：**そうですね。当時，負債はとても大きくなっていました。この負債は，戦後ますます大きくなっていきました。借款は何に使われていたのでしょうか？さほど有益でもないことにもっぱら使われていました。自分たちで作ったり，したりすることのできる可能性をつぶしていました。それに，つまらないことにまで借款を入れていました。また，不正もありました。

銀行の為替レートは 1 ルーブルが4.12トゥグルグでした。しかし，借款は「変動ルーブル」で供与されていました。1 変動ルーブルは 8 トゥグルグで計算されるのでした。これでは負債額が急激にふくれあがるのは当然です。変動ルーブルの為替がこのような高額でしたから，いつのまにか返済不可能な多額の負債になっていたのです。しかし，Y.ツェデンバルを筆頭とするモンゴル人民革命党の幹部たちは，負債を減らすための努力をまったく行わず，それどころか，さらに増える方向で方策をとっていたのです。

私は，ソ連がモンゴルの発展のために融資したのではないと確信しています。負債のせいでモンゴルはさらにソ連に従属していったのです。モンゴルの知識人のあいだで語られていたことについて，ソ連のKGBは詳細に情報を得ていました。彼らはモンゴル社会で生じている動向に関してとても多くの情報源から察知していました。私たちが独自に何かやろうとしても，それがソ連の気に入らなければ，負債をたてにとって私たちに圧力をかけるのですよ。私たちは負債のためにソ連への従属が進んでいったのです。政治的にとても危険な結果が，この負債を通じて生じることは明らかでした。

この負債はまた，もう１つの政治的意味を持っていました。この負債を通じてソ連はモンゴルの社会関係をまさに自分たちのモデルにあわせようとしたことです。わが国の伝統的な遊牧社会の特徴をまったく考慮せずに，モンゴル社会を完全にソビエト型にする政策だったのです。この借款と共に，ソ連からたいへん多くの専門家がモンゴルにやって来ました。彼らは主にモンゴルの都市部に生活し，特別支給を受けていました。それは「国内の外国」を形成していたのです。モンゴルに日用品が不足しているのをいいことに，特別支給の店で商品を高く売っていました。

わがモンゴル国は牧畜の国です。それなのに店頭では肉が不足していたのですよ。ほとんど店頭にはありませんでした。ところが，ロシア人用専門店ではモンゴルの肉が山積みになっています。まずロシア人用専門店に肉を供給し，それからモンゴルの店に卸すために，そんなことになっていたのです。モンゴルで働いていた専門家には，その家族や親戚がやって来ます。彼らがモンゴルの都市部を「占領」していたようなものです。集合住宅はほぼ彼らの支配下にありました。モンゴル経済のすべての部門にロシアの「顧問専門家」が派遣されていました。彼らは何をしていたか？この問いに答えるのは難しいことです。つまり，何もしていなかったので答えられないのです。この「顧問専門家」はとても高い給料をもらっていました。まったく同じ仕事をしていたモンゴルの専門家の３～４倍の給料です。彼らの給料も家賃も光熱費もすべてモンゴルの負担でした。

国営企業にはモンゴル人の専門家を従えて必ず１人のロシア人専門家が配されていました。そこでロシア人専門家が働く何の理由もなかったのに。それほどおかしなことでした。しかも，ロシア人「顧問専門家」は何の責任も負わないのです。それなのに権威だけはあって，自分勝手に叱りとばすのでした。１人が２～３年の任期でやって来ていました。期間を延長して滞在する者もいました。生活費はモンゴルが負担し，たいそう奢侈な生活をしていました。水道や光熱を節約するなんてありません。やりたい放題です。彼らにはモンゴル法が適用されませんでした。たとえば，川で魚捕りをする時に，彼らは爆薬を使うのです。モンゴルではもちろん禁止されている方法です。しかし，「顧問専門家」が法律違反をしても，誰もいつもどんな処罰も課することができません。これらの「専門家」がモンゴル経済に与えた損害ははかりしれません。

**ＩＬ：**あなたはモンゴル人民革命党ウムヌゴビ県委員会の第１書記を務めてソ連共産党大学に留学したのですか？当時，この大学にはどんな人たちが，どんな選抜を受けて留学していたのですか？

**ＢＮ：**そうです。ウムヌゴビ県の党委員会の第１書記であった時に，ソ連邦共産党大学に留学しました。一般的に当時は，県の行政機関に勤務している人たちや県の党委員会に勤務している人たちをもっぱらこの大学に留学させていました。大学へ留学させる選抜基準は勤務評定でした。勤務状態の良い人たちは優先されます。またいろいろと審査するのですよ。当時，党職員の責任はたいへん重いものでしたよ。少しでも落ち度がある人は党職員にはなれませんでした。とりわけ党幹部に関しては厳しかったのです。そのような職員の中から選んで留学させていました。その大学へ行くにはまず，自分で党中央委員会に申請書を提出しなければなりません。その申請書を政治局の人事課が審査していました。さらに中央委員会書記会議で決定していました。イデオロギーや政治的な多くの審査を経て決定されるのです。申請書を出したからといって全員が留学できるわけではありません。1962年には私を含めた20名が留学しました。

**ＩＬ：**留学生のあいだでモンゴルの情勢についていろいろと話し合っていたようですね。この点について少し話していただけますか？

**ＢＮ：**留学以前に党や地方行政の責任ある職務についていた人たちですから，話すテーマには事欠きませんでした。多くのテーマで大いに話しました。一般に主なテーマはモンゴルの発展に関する問題でした。あそこで学んでいた留学生の多くがモンゴルの発展速度について大いに不満を持っていました。ソ連に留学して自国の状況と比較することができるようになったのでした。当時は両国の発展速度はかなり異なっていました。ソ連政府の施策は迅速で幅広く，時機を得たものであるように思えたものです。ソ連の経済や社会の規模は比較にならないほど巨大でした。国民の教育，知識水準もまったく違います。たくさんのことを比較してみることができました。

**ＩＬ：**あなたは1964年12月のモンゴル人民革命党中央委員会第６回総会で，党内の腐敗，とりわけY.ツェデンバル書記の不正について具体的な証拠をもって批判されましたね。

**ＢＮ：**私の学んでいたソ連共産党大学では３年間学んで卒業する制度でした。留学して２年半経った1964年12月にモンゴル人民革命党中央委員会第６回総会が開かれました。卒業までまだ半年ありました。総会で党の指導者や党内の腐敗を批判することは「得策ではない！」とわかっていました。すでにモンゴルの政界で数年間働いて，それなりの経験は積んでいましたからね。留学仲間には，総会に参加してY.ツェデンバル批判を行うつもりであることを言いませんでしたよ。１人か２人には遠まわしに言いました。彼らはモスクワの空港に見送りに来てくれました。そのうちの１人が私に航空券を買ってくれました。

1964年12月の党中央委第6総会ではそもそも「党と国家の監査改善」について審議されました。このテーマでY.ツェデンバル書記が演説をしました。彼はこの演説を3時間読みあげました。また計画委員会のT.ラグチャーも演説しました。私たちが総会に参加してY.ツェデンバルと党の政策を批判しようとしていたことについて党中央委員会政治局員は情報を得ていたようです。当時，モスクワ留学生の中にも「情報伝達者」がかなりいたのです。党政治局では私たちに「反党グループ」のレッテルを貼り，強硬に排除しようと決めていたようです。それは私たちだけではなく，今後も党内に別な思想を持つ者を許さないように今のうちに見せしめるためでした。

一般にY.ツェデンバルの施政方針や施策，モンゴルとソ連の友好という面について「知識人の迷妄」時代に生まれた批判的な噂は絶えることなく，人口に膾炙していました。それゆえに，この総会において，こうした噂話にいよいよ決着をつけようと計画されていました。「反党グループ」という名前を私たちにわざわざ付けたのは，「モンゴル人民革命党内部に反党グループがいて，彼らがモンゴル人民革命党の仕事とその幹部についていろいろな批判を意図的に創作して社会に広め，党の結束を壊し，党の指導的な役割を止めさせようと狙ったものだった！」という考え方を社会に浸透させるためでした。

当時，ソ連ではフルシチョフがソ連共産党中央委員会第1書記から陰謀によって解任され，保守主義者ブレジネフが党書記になったのです。このような政治的に危うい時期に，モンゴル人民革命党中央委員会総会が開かれたので，フルシチョフの身に起きたようなできごとがモンゴルでも起きる確率は高かったのです。この時の会議の雰囲気は，反Y.ツェデンバルに向かう可能性が充分にありました。モンゴルの社会では「Y.ツェデンバルから離れよう！」という傾向が強く出ていたのです。ですから，Y.ツェデンバルはこの会議に対してしっかりと準備していたのです。

「B.ニャムボーとTs.ローホーズが自分を批判する！」とY.ツェデンバルは知っていました。そしていくつかの自衛策を用意していました。Y.ツェデンバルを擁護する発言者を確保していました。総会の公式演説が終わるや否や，党中央委統制委員長のS.ロブサンラブダンと党ウランバートル委員会第1書記のB.アルタンゲレルの2人が発言することになっていました。彼らは会議の雰囲気をY.ツェデンバルに有利に転換させようとしました。D.トゥムルオチルやL.ツェンドの例を挙げて私たちを批判したのです。「このような夢想家たちと，わが党は厳しく闘うのである！」などと話しました。Y.ツェデンバルを擁護して私たちを批判するために，全部で24名が発言しました。

この会議が充分に準備されていたことは私たちも知っていました。私たちが会議でY.ツェデンバルを批判しようとしていることを本人が知り，たいへん驚き慌てて，どんな代償を費やしてでも権力を手元に残すために全力を使って日夜準備していることを私たちは知っていたのです。ニャンタイスレンギーン・ラムスレン氏が，この件につい

てB. ジャムツという人を通じて秘密裏に教えてくれました。総会参加者の中にはY. ツェデンバルの政策に批判的な人がたくさんいたのです。

もし，Y. ツェデンバルがこの会議を上手に運営して対抗策を講じなかったならば，総会は反ツェデンバルに傾く可能性は充分にあったのです。党中央委員会総会の参加者たちは，一般の人びとから手紙や口頭での訴えをたくさん受け取っていたのです。この総会で「Y. ツェデンバルを解任するのが適切である！」という意味の手紙ですよ。総会参加者の多くが両方の考えを持っていたでしょう。Y. ツェデンバルが解任されるかそれとも続投するかという両方の考えです。しかし，Y. ツェデンバルは周到に準備したため，会議の雰囲気を自分に有利に仕向けることができました。会議で発言を希望した人はたくさんいましたが，Y. ツェデンバルは許可しませんでした。そして自分を守る立場の人にだけ発言を許可しました。

発言者リストにおいて，私の名前は12番目に，ローホーズの名前は19番目に，ソルマージャブの名前は７番目に記されていました。サンジーン・バター，B. デジドらY. ツェデンバルの擁護者たちの名前が私の名前の前後に置かれていました。Ch. プレブジャブ，Ts. ポンツァグノロブ，S. ジャランアージャブ，Ts. ドゥゲルスレンなどのY. ツェデンバルに最も親しい取り巻きたちが，私たちを批判し，Y. ツェデンバルを擁護しました。彼らは私たちを「党の基本路線に反する者，ソ連に反する者，L. ツェンドやD. トゥムルオチルら反党活動を行う敵対分子と野合する者，売国奴！」などと批判しました。私のこの総会における発言の趣旨は以下のようなものでした。

── 政権を掌握している党としてモンゴル人民革命党が最も留意しなければならないのは国家経済である。ところが，Y. ツェデンバルを指導者とするわが党の幹部は，借金による社会主義建設を言い続けている。この不健全な思想は直ちに断ち切らなければならない。

── 現在，わが国は，ソ連から自国に必要なすべてにわたって好きな時に借金をして，ただあたら食べているだけの国に成り下がっている。この状態を今後も続けるならば，国家の存亡の危機に遭遇するであろう。この状態をY. ツェデンバルは把握することができない。

── 日用品の価格が常に少しずつ値上がりしていることが国民生活の悪化に多大な影響を及ぼしている。国民のあいだでは欠乏や生活苦についてばかり語られている。国民の意欲や積極性が著しく低下した。この点に対して，Y. ツェデンバルは少しも心配している様子がない。

── Y. ツェデンバルは対外的に世界の労働者運動における名声を得ようと努力してきた。が，実際には自らが腐敗し，遅れているため，まったく評価されていない。Y. ツェデンバルはソ連とモンゴルの友好を守り，それを発展させる唯一の人物という印象を人びとに植えつけようとしている。しかし，この友好関係はY. ツェデンバルなしでも正

しく発展させることが可能である。
── Y.ツェデンバルとはそもそも何者か？彼はモンゴル人民革命党の指導者でも，社会主義を建設しようとする現代モンゴル人の指導者でもなく，小資本家の破産した代理人となった。私はY.ツェデンバルの個人的欠点を修正しようと何度も指摘した。しかし，この人は直らなかった。彼はすべての面で最高度に腐りきった輩になってしまったと見える。
── Y.ツェデンバルは，ただ単に党と国家の秩序や職務責任を失った人間というだけではなく，国家に対して犯罪をなした人間である。Y.ツェデンバルは国民の要望をかなえる慈悲深い人を装って，国家の資産をむやみやたらと浪費している。
── Y.ツェデンバルが自分の過ちを正直に認めたことは１度もない。それどころか，罪を隠蔽し，自分の身を守るために，いつでも誰でも地方に追放することを厭わなかった人間である。L.ツェンドやD.トゥムルオチルらの問題を議論した党中央委員会総会はY.ツェデンバルが直接指導し，陰謀を準備して，彼らを地方へ追放した。党は啓蒙組織であり，党幹部は啓蒙者でなければならない。しかるに彼にはそのような資質はまったくない。それどころか，有能な人材を貶めて解任し，地方に追放するという非常に性悪な人間になってしまった。
── Y.ツェデンバルが党と政府の幹部でいるあいだは，わが国は改善されない。Y.ツェデンバルがいかに努力し，どんな手法を使っても，わが国民の信頼を再び勝ち取ることはできまい。
── Y.ツェデンバルが今，この会議で何を考えているか，私にはわかっている。彼はどうすれば自分の解任を免れるか？ということしか考えていない。この総会さえ乗り切れば，次の総会までは時間もあれば，余地もあると考えている。Y.ツェデンバルをモンゴル人民革命党書記長から解任する問題を議論する時，彼は党や政府の指導者は自分をおいてほかにないと恥ずかしげもなく言う人間である。Y.ツェデンバルのように汚れた人間をもしくはY.ツェデンバルと連携して愚行をなす人間を党内に探すのは難しいことである。むしろ，わが党には，モンゴル人民革命党や国家を指導するために養成され，選ばれた人材が豊富にいる。党中央委員会はY.ツェデンバルに引導を渡し，国民の期待に沿った決定を今こそ下すべきである。
というものでした。

私の発言のすべては2004年に出版されました。あなたたちも読んだことでしょう。私はY.ツェデンバルについてこれ以前にも２度批判しています。1964年の批判は３度目だったわけですよ。最初は1959年の総会で批判しました。２度目は1962年です。最初は「モンゴルの国の運命はY.ツェデンバル氏，あなたにかかっているのですよ。あなたは自分の欠点と仕事のやり方を急いで修正しなければならない。国民に近づき，国民の声を聞くべきです！」と批判しました。

私はY.ツェデンバル自身と何度も会っていました。「私たちはモンゴルの国益を第1に考えるべきだ。ソ連にはソ連の，社会主義諸国にはそれぞれの国益があるでしょう。しかし，それらよりもまずモンゴルの国益を優先して考えるべきです。私たちは自国の国益を忘れて，ソ連と社会主義諸国の国益を第1に考えているのではないですか。私たちは自国の利益のために闘わなければならないのですよ。私たちは2つの超大国に囲まれています。両者とも機会があればわが国を食おうと考えているのですよ。ですから，どちらの国とも対等に関係を結ばなければなりません。どちらかを敵視すれば，自らに悪影響を及ぼします。どちらとも対等な関係を結べば，わが国にとって利益となるでしょう！」と話したのですよ。「あなたは模範的な人間ではありません。あなたは個人的な欠点を早く直すべきです。とりわけ家庭の問題に注意すべきです。党の指導者として相応しくない行いがずいぶんあります。党員や幹部に対するえこひいきが多すぎます。こういうことではいけません！」と話したものです。

1964年の会議で彼を批判したのは，それまでの私の言葉にまったく耳を貸さず，自分の欠点を直すためにまったく努力しなかったからです。私はすでに「この人は直らない人だ！」と結論づけていました。

それ以前にも1度，D.トゥムルオチルが会議上で彼に「Y.ツェデンバルよ，もう辞めるべきです。もしあなたがこんなふうに仕事しているのかなんだか分からないような状態でいるならば，国全体に害悪を撒き散らすことになります。あなたは障害になっています。まだ被害が少ないうちに，役職を別の人に譲るべきです！」と直接言ったこともあるのです。

彼には，私たちの言葉を受け入れることができない理由があったのです。そのことも私たちは了解していました。それは彼のロシア人妻ですよ。彼はすっかりロシア人妻の手中に落ちてしまっていたのでした。そもそも妻に権限を掌握されている男などいかに男であると言えるでしょうか？モンゴルではそういう人のことを「子どもやイヌのおもちゃになった人！」と言うのです。Y.ツェデンバルは私生活においてまさに「子どもやイヌのおもちゃになった！」状態でありながら，「モンゴルの国家を指導する！」と努力していたのですよ。彼女はソ連のKGBと関係があったと言われるのも無理はありません。あの「奥さま」とツェデンバルの結婚自体，ソ連のKGBが企図したものだったのですよ。

**ＩＬ：**あの会議での発言で，「Y.ツェデンバルは人びとを自分の側につけるために汚い手を使っている，賄賂を与えている！」と述べていますよね。そういうことは本当にあったのですか？

**ＢＮ：**党と国家を指導する能力がY.ツェデンバルには本当にありませんでした。モンゴル人のあいだではこんな言葉があります。「思いがあっても，力がいたらない！」という言葉があります。Y.ツェデンバルにはモンゴル人民革命党と政府の直面している

問題に対して全力で努力したところで，指導力が足りませんでした。だから，どうでもいいことに奔走し，混乱させ，他人の口車に乗り，必要なことを言うこともできない腐敗した人間に変わったのです。Y.ツェデンバルは最も遅れた人びとに擁護され，党と政府に常に多くの害悪をもたらしました。彼らとりまきは，互いに友人であるふりをしながら，実は嫉妬や怨恨をもち，迫害しあう人たちでしたよ。酒浸りの宴会を企画し，賭けをして遊び，職場で騒ぎたて，大勢の目の前で毎日，種オスヒツジが交尾調節布を足にひっかけて歩くように恥をさらしていました。人民革命党と政府の高官10名足らずに対して，Y.ツェデンバルは直接「賞与」という名目で二重の給与を毎月こっそりと渡していたのです。もともと彼らは国から公式に高給をもらっていたのですよ。この特別な賞与は正式な給与とは別にもらうものでした。Y.ツェデンバルは勲章を与えることもありました。国や国民のために顕著な功績を何も残していないにもかかわらず，勲章を与えるのですよ。また，経験のない政治家を高い役職につけたり，高い給与を与えたりします。外国の高級な保養所に派遣したりします。こうして，自分の擁護者たちを作っていったのですね。

D.トゥムルオチルなどはこの「賞与」に激しく反対していたのです。私もこの点について個人的に何度もY.ツェデンバルに意見しました。しかし，彼は「党の幹部として尽力している人に奨励金は必要なのだ。これはわが国の党にだけあるのではない。他の国の党指導者でもしていることだ！党の団結のために与えているのである！」と，真っ赤になって言い訳していました。言い換えれば，「団結」を金で買っていたわけですよ。金銭を受け取った人は，文句も言わないし，まちがっても批判しないわけです。

党中央委員会政治局で１度，特別賞与を廃止する件が審議され，決議案が出されました。つまり，「党の団結のための金銭授受の禁止」という決議案ですよ。この決議案が政治局の局員に提示され，全員が承認し，署名しました。しかし，Y.ツェデンバル１人が署名しなかったのです。彼が署名しなければいかなる決議も出すことはできませんからね。こうして決議は成立しませんでした。当時，封筒に入った金をY.ツェデンバルから受け取ることがすっかり定着していましたね。

当時，党の幹部たちが，その家族と外国で休暇を過ごす費用を国が出していました。Y.ツェデンバル書記長自身も７月中旬，ナーダムのあとにソ連で休暇を過ごしていました。毎年ですよ。そうして10月か11月に戻って来ていました。すべて国の予算でした。党の政治局員たち，書記たち，閣僚会議議長や副議長もみな同じでした。

**ＩＬ：**あなたは「Y.ツェデンバル氏は個人的には非常におとなしい人だ！」とおっしゃいましたよね。この点について少し具体的に話していただけますか？

**ＢＮ：**確かに。Y.ツェデンバルはプライベートでは決して厳しい頑固な人ではなかったでしょう。人としてはとてもいい人なのですよ。非常に穏やかな，怒りの少ない人でした。しかし，仕事の手法や個人の欠点は，どうしても批判せずにはいられませんでし

た。ソ連の国益を過度に守ろうとし，自国の国益を守ることができず，ロシア人妻の言いなりで，自分の生まれ故郷，モンゴル領土の一部をソ連に贈りものとして割譲したなど多くの誤りを彼自身が行ったのです。これについて発言したり，祖国の運命に心を痛めて彼の誤りを批判する人びとを冷徹に排除してきたりしたことなどが批判せずにはいられない点でした。

## 13　批判の代償

**ＩＬ：**あなたたちはなぜ「反党グループ」と呼ばれたのですか？

**ＢＮ：**反党グループ」などまったく存在しませんでしたよ。しかし，党中央委員会総会後に『ウネン』紙に掲載された「モンゴル人民革命党中央委員会第６回総会決議」という記事で私たちを「反党グループ」と名づけていました。その「決議」なるものは，実際に総会で決議されたものではありません。本来なら，総会決議案は総会参加者全員に配布される規則でした。参加者はそれを読んでその決議案に賛否を表明するのです。そして，合意を得て決議されるという規則でした。しかし，あの総会では解散前に何らの案も配布されず，審議もされず，採決もされなかったのですよ。

総会で審議されたのは，Y.ツェデンバルを批判したTs.ローホーズと私の２人に関する２つの問題でした。１つはTs.ローホーズと私の２人をモンゴル人民革命党から除名する件，もう１つは私たちのソ連留学経費の支払いの件でした。これら２つの問題について総会で審議され，採決されました。が，私たちに関するほかのどんな問題も総会参加者は決議しませんでした。

あの総会は1964年12月21日朝９時に始まって12月22日朝６時に終了しました。一晩中会議は続いたのです。ところが，総会が終わって４日後に『ウネン』紙に「総会で満場一致で決定」の見出しのもと，「人民革命党中央委員会第６回総会決議」なるものが発表されたのです。これは総会の名前で出された「偽決議」です。党の規約によれば，これは有効な決議ではありませんよ。総会参加者が決議案を知ることのないまま出されたというのは党の規約によれば認めがたいことです。

総会メンバーの名を使って彼らの名のもとに決議案を出すということはY.ツェデンバル以外の誰も絶対にしませんし，してはなりませんし，許し難いことですよ。このような恥ずかしいことを党の指導者が行うということが，この党がまさに破綻していることの証です。モンゴル人民革命党の中でこのようなことをするのはY.ツェデンバルだけでしたし，彼はこのようなことを何度も行ったのです。彼はこんな悪事に慣れた人間でしたよ。ときおり，彼のしたことを見て，よくもこんな醜悪な方法を考えつく知恵が彼のどこにあるのか？と思われるのでした。日常の生活や仕事上ではまったく頭の働かない人ですからね。悪いことだけは，誰も思いつかないようなことを思いつくようで

す。驚くべき不思議なことですよ。

あの時，もし決議案が事前に配布されていたら，さまざまな意見が出たにちがいありません。総会終了後に『ウネン』紙に発表されたような「偽決議」のようなものは出なかったでしょう。Y.ツェデンバル自身，総会参加者を恐れていたからこそ，決議案を見せることなしに，あの「偽決議」を出したのです。

**KY**：総会から出てくる時，逮捕されるかもしれないと恐れていましたか？

**BN**：1964年12月22日朝6時にモンゴル人民革命党中央委員会第6回総会が開催された政府庁舎大会議場の出口で，T.ラグチャーが私の「モンゴル人民革命党総会参加者身分証明書」を取り上げました。「出たらすぐに逮捕されるだろう！今，このドアの向こうに私を逮捕し，連行するために内務省の車が横づけされているのだろう！」と思いながら外に出ました。しかし，そこにはいかなる車もありませんでした。「ともかく家には帰れるのだ！」と思いました。

家に帰って座っていると，兄のアリルディが「てっきり，夜中に内務省に連れて行かれたと思ったよ」と言って入ってきました。同僚や友人からの電話が途切れませんでした。家まで来る人もいました。私を慰め，落胆することのないよう配慮してくれるのです。私は「みんな，すぐに帰ったほうがいい。さもなければ，反体制ニャムボーのシンパにされるぞ！」と言って彼らを帰しました。総会が終わらないうちに「こいつらをすぐに逮捕すべきだ。こいつらが裁判で頭を下げている姿を見ようじゃないか！」と言う人もいましたよ。

総会の最中に長い休憩があったのでした。休憩中に党中央委員会政治局員が会議をしたようです。これについてはバヤンホンゴル県のスフバト知事が教えてくれました。「さきほど政治局員で会議をしました。彼らはあなたたちの問題を議論した。多くの人があなたたちを逮捕すべきだという意見を述べた。そして検察庁のD.ヨンドンドゥイチルを呼んだ。彼はあなたがたの逮捕を躊躇していた。『モンゴル人民革命党中央委員総会メンバーは，総会において意見を述べて批判する権利を有していますよ。意見や批判がすべての人に支持されなければならないことはありません。彼らは国家に反逆したでしょうか。ほかに逮捕される理由となる行為はしていません。逮捕してしまおうと思ってもどんな法律で処罰するのですか？』と述べてあなたたちの逮捕を拒否したのです！」と私にこっそり教えてくれました。

国家検察庁のD.ヨンドンドゥイチル，最高裁判所長官のKh.ダムディン，内務省副大臣Y.グンセンなどはほとんど同じ考えだったようです。彼らはY.ツェデンバルに，「逮捕すべき法律の条項がない。もし犯罪をしたという証拠があれば，逮捕する問題を協議してもよいだろう！」という意見を述べたようです。内務大臣のB.ジャンバルスレンも私たちの逮捕を拒否しました。「われわれには政治犯を作って粛清してきた苦い経験がある。モンゴル人民革命党中央委員会総会で批判を述べた人間をどんな理由で逮

捕するのか？その批判が誤りか，正しいかを議論するならともかく！」という意見を述べたようです。

総会終了後，私たちの問題を人民革命党中央委員会統制委員会が協議しました。およそ20日以上協議しました。その統制委員会で私は「私を牧民として異動させようとしているのですね。私は牧民出身です。私は家畜を放牧して育ってきた人間です。今でも家畜を放牧することは何ら困難ではありません。しかし，１つだけはっきりさせてください。私を「牧民」とすることは罰なのですか？なぜ私が処罰されるのですか？私はモンゴル人民革命党を除名されました。私にはその理由もわかりません！これは党中央委員会総会で党の指導者の過ちと欠点を批判したための処罰なのですか？Y.ツェデンバルの過ちと欠点を批判したことで処罰されているのなら，私はそれを受け入れません！」と述べました。すると，統制委員長のR.ロブサンラブダンが「党の総会で批判したから処罰しているのではない。そう思っているなら，それは誤解である。他の理由からであってもいいでしょう！」と言いました。「私が批判を述べたから処罰しているのではないのですね。それでは，その他の理由というのを言ってみてください。私はそれを自分で聞きましょう。それが事実なら受け入れましょう！処罰を受けましょう！私が罪を犯したのなら裁判にかけられるはずです。私は党中央委員会総会参加者として，総会で批判を述べました。私は党や人民に敵対することは述べていません！Y.ツェデンバルを批判しました。それは事実です！私の批判はまったく正しい，正直な批判であり，国家にとって必要な批判であると私は認識しています！このことを誰も否定できません！」と反論したのです。すると，ロブサンラブダンは声をあげることができません。ほかの誰も声をあげることができませんでした。そうするうちにロブサンラブダンが，「そのように問題提起するなら，裁判にかけますよ！」と言いました。そこで私は「それなら裁判で明らかにしましょう！」と言って，その議場から出て来たのです。その場から出てまっすぐ家へ帰りました。

わが家では母と兄弟たちが来て私を待っていました。彼らは私が逮捕されずに帰って来たのでたいへん喜びました。そして私は「党中央委員会は私をドルノド県のエレーンツァブ国営農場に牧民として異動させることにしたが，私は強く抗議して，その会議もどきを放り出して来たよ！」と彼らに言いました。すると彼らは私が逮捕されるのではないことを知って大喜びして「なんだっておまえは抵抗するのだ？すぐにドルノド県に行こう！」と言います。兄はとても怒って「お前は逮捕されなかっただけで，めでたしなんだ。いますぐエレーンツァブに行って放牧しろ！さもなければ，突然，内務省に捕まっちまうぞ！」と言いました。彼らは私が内務省に捕まることを恐れていたのです。その日から，私は家にいて何もすることがありませんでした。それで，家で本ばかり読んでいました。するとある日，兄がまた怒って「おまえはまさに罪人なのだぞ！こんな時に本を読んで何がわかるっていうのだ？そんなことをしているより出発の準備をし

て，早く行くべきところへ行くのだ！」と言います。私は兄の言うことをまるで無視していました。そうしてある日，兄は分厚い羊毛つきの外套とフェルトの防寒長靴を持って来てわが家に置いてゆきました。「内務省に逮捕されたら，これを着て行け」と言うのでした。

私もまだ40を越えたばかりでしたよ。若かったのです，熱血だったのですねえ。家での読書に飽きて外出すると，近くに内務省の密偵たちがうようよしているようでした。私が誰と会うか？何をするか？と密偵していたのでしょう。私のうしろからみなついて来ていました。私は知らないふりをしました。ときどき，彼らを大いにからかいましたよ。彼らが私をつけていることはよくわかっていました。私が彼らに気づいていることを彼らは知らなかったでしょう。自分たちは気づかれていないと思っていたにちがいありません。私のうしろからついてくるのです。それで，私は突然，立ち止まり，戻って彼らと正面に向き合ってすぐ横を通り過ぎたりしたものです。

わが家のアパートの前に３階建てのビルがありました。そのビルの１室に私を密偵する目的で６人の「密偵グループ」が住んでいたようですよ。私はわが家の窓から彼らをいつも眺めていました。交替制で毎朝，新しいメンバーに入れ替わるのです。また機材のようなものを運び入れているのも見えました。そしてある日，そのビルの扉を家人に教えて「今から私は外出します。あのビルから何人が私のあとをついてくるか見ていなさい！」と言って出かけました。私たちのアパートには１つの軒先がありました。私はその軒先を曲がるや否や立ち止まり，振り返って例の扉の方を，隅からこっそり見ました。くだんのビルから６名が走ってくるではありませんか。私は彼らに見られないように軒先のなかに立ち止まっていました。彼らは私に気づかずに通り過ぎて行きました。ふと見ると，突然止まっています。そこで私は彼らの脇へ出て真っ直ぐに内務省に向かいました。あとから彼らはついてきます。

内務省に行き，内務大臣B.ジャンバルスレンに面会を求めました。大臣が私に会うかどうかわからないままずいぶん長く待ちました。そうするうちに中に入ることが承認されました。私はB.ジャンバルスレン内務大臣をよく知っていたのです。私が人民革命党ウムヌゴビ県委員会第１書記として任命された時，党ウランバートル市委員会のイデオロギー担当書記の任務を彼に引き継いだのです。大臣室には副大臣のY.グンセンも一緒にいました。私はさっそく「あなたたちは私を密偵しようと考えているのですか？それならこんな探り方をするものではありません。あなたたちにとって私を密偵する必要がどうしてもあるなら，彼らをわが家に招きいれましょうか？私はあなたたちに必要な情報を彼らに話してあげることができますよ！」と激しい調子で言いました。

ところが２人はそれぞれ「私たちは君を密偵などしていませんよ！」と述べるのです。「あなたたちは密偵していないのですか？それなら，どんな人たちが私を密偵しているのかを特定してください！私を日夜，何人かが監視しているのです。誰が監視している

かを特定するのはあなたたちの任務でしょう！」と私は言いました。すると，B. ジャンバルスレンは「君を監視しているという人間が本当にいるのか？いないのか？われわれは知りません。君は自分を監視していると思いこんでいるのではないですか？そもそも君はわが省のことは嫌いな人ですからね。私はそのことをよく知っていますよ！」と言うのです。そんなふうに言うので私もかなり頭に来ました。それで「そんなふうにとぼけるなら，私を尾行しているあなたの部下を指し示してやろう！」と言いました。

すると彼は「私たちには君のあとをついて街をほっつき歩く暇はない。君は彼らの理由を自分で調べるがいい！」と答えるのですよ。私が「ジャンバルスレンよ，あなたはいつからこの省が好きになったのですか？私たちが党の仕事をしていたころ，私たちは何を話し合っていましたっけ？あなたは内務省に来てそれを忘れてしまったのですか？あなたの記憶力がそんなに悪いのなら，私はあなたの話したことを月日つきで思い出させてあげられますよ！私たちがあのころ話していたこと以外のことを私は話していません。ただ別な場所で話しただけです。私のY. ツェデンバル批判は，当時あなたと話したことと変わりないことをあなたは知っているはずです。私はモンゴル人民革命党やモンゴル国家に敵対することを話してはいません！」と彼に言いました。すると，彼は黙り込んでしまいました。

D. グンセン副大臣は私たちの会話を神妙に聞いています。こうして私は内務省を出ると，内務省の密偵たちを引き連れて帰宅しました。内務省は私たちを密偵する仕事をやめたりはしませんでした。それは地方に行くまで続きました。それどころか地方でも密偵は続けられたのでした。

そのほか，党中央委員会第 6 回総会が終わった日からTs. ローホーズ，B. ニャムボーらの「反党グループ」について，あらゆるメディアで日夜，悪く言われるようになっていました。私は新聞に書いてあることを読まなくなり，ラジオの報道をほとんど聞かなくなりました。「そこには真実はない！」とわかっていたのです。まったく無視しました。すべての権力がモンゴル人民革命党に集中していたのですから，どんな嘘や偽を報道するかもわかりきっていました。私たちの話したことだけでなく，国の歴史さえもねじ曲げて書いてしまうのですから。国民はプロパガンダとはそんなものだとすっかり了解して，まったく信用しなくなっていたのです。モンゴルには「ラジオのように無駄話をする！」という言葉があります。嘘のプロパガンダをしているうちに人びとがそれを信じなくなったことを表現する言葉です。

党中央委員会第 6 回総会が終わるとすぐに，大学や専門学校，公的機関，知識人のあいだで「反党グループ」と，そのシンパや支援者を暴き出すキャンペーンが始まりました。これはN. ロブサンラブダンを長とする人民革命党統制委員会と内務省が，Y. ツェデンバルの直接指導のもとに行ったことです。モスクワのソ連共産党大学に私と一緒に学んでいた留学生のところにも「反党分子ニャムボーのシンパ探し」の人員が

派遣されました。B.ラムジャブ，J.ジャミヤン，G.イシなどが先頭に立っていました。彼らは「B.ニャムボーと一緒に留学していた連中はみなでお金を集めて時計をプレゼントしていた。ニャムボーの妻子が帰国する時にチケットを買ってあげた。モスクワ駅に見送りに行った」などと「立件」して，いかにも重大なできごとのように発表したのです。また「反党分子ニャムボーのシンパは，国の発展の現状を否定し，国民生活は貧困で悪化したなどと喋り，ラジオ『ボイス・オブ・アメリカ』を聴いている」などと「立件」して発表していたのです。これらに基づいてソ連邦共産党大学で一緒に学んでいた留学生は退学になりました。

第6回総会では「ソ連邦共産党大学の留学生はみなB.ニャムボーのシンパである。彼らはみなB.ニャムボーと同じ思想をもった人びとである。彼らの代表者としてB.ニャムボーを派遣したのである！」などと批判をする者もいました。私の親しい知人は，私が総会に参加するためにウランバートルに向かったころ，休暇で黒海沿岸に行っていました。彼がモスクワに戻って来ると，くだんの「反党分子ニャムボーのシンパ探し」が来ていたのです。そして「あなたは当時何をしていたのか？ニャムボーに時計を買ってあげたメンバーだったか？」と訊ねたそうです。それで彼は「もちろんですとも。他の人が何をしたというのですか，私もまたみんなと一緒ですよ！」という意味のことを言ったのでした。そんなことを言ったために彼もまた退学になりました。

また，1人は歌を歌って退学になりました。歌ったのはモンゴル民謡ですよ。とても有名な歌です。歌詞の中に，

岩のあいだに挟まれた
カワウソの子はかわいそう

という言葉がありました。彼はこの歌を歌った時，少し飲んで軽く酔っていたようです。すると，呼び出されて尋問されたのでした。「いったいどういう意味でこの歌を歌ったのか？」「岩のあいだに挟まれたカワウソとは誰のことか？」「挟んでいる岩とは誰のことか？」などと尋問されたのだそうです。そうして彼は退学になりました。

## 14　地方での遊牧生活

**BN：**地方に行くと人びとはまったくちがっていましたよ。私の妻は医師です。彼女はモスクワに留学していました。私たちはモスクワで一緒に生活していました。3人の子どもたちはまだ小さかったです。私がドルノド県のエレーンツァブ国営農場に「牛飼い」として赴いた時，家族も党統制委員会から呼び寄せられました。そして私たちは一緒に行くことになりました。ドルノド県保健局は私の妻をエレーンツァブ国営農場所属の医師に任命しました。それまでエレーンツァブ国営農場には医師がいなかったのです。わが家がエレーンツァブに到着すると，たくさんの人が集まってきて，ゲルを立て

てくれ，羊肉や牛乳を持ってきてくれました。彼らは，そもそも「B.ニャムボー１人が来る！」と思っていたようです。私が家族と一緒に来たので喜んでくれました。こうしてエレーンツァブ国営農場にやって来て，そこで11年間暮らしました。

当初，「牧民」として赴任しました。ある家庭の「羊飼い見習い」として働きました。私が放牧する場所は，郡の中心地からそれほど遠くはありませんでした。妻は国営農場所属の医師として仕事に就きましたから，初めは郡の中心地にゲルを立てて居を構えることにしました。私は郡の中心にある自宅から放牧地に行き，そこの班長の家に泊まりこむことになりました。放牧の当番がない時だけ，郡の中心地にある自宅に戻ります。こんなふうに生活をしていたところ，妻は遠隔地の病人に呼び出されることが多くなったのでした。そうなると，妻は遠くまで病人を診に行かなければならないのでした。そんな時，子どもたちをどうしようか？という問題が出てきました。当時，まだ子どもたちは幼かったのです。最初は何とかしようとがんばってみました。しかし，どうしようもなくなりました。エレーンツァブ国営農場の病院に私の妻以外に医師がいないのですよ。そこで，このような状況について私はY.ツェデンバル書記長に手紙を書きました。彼に「私が郡中心地で働くことを承認してほしい」と要請したのです。Y.ツェデンバルは私の希望を認め，私が郡の中心地で働くことを認める返事をくれたのです。その回答は党中央委員会統制委員長S.ロブサンラブダンを通じて受け取りました。こうして３ヶ月後に羊飼い見習いの仕事は免除されました。こうして郡の中心地で働くようになったのです。

内務省から私には「300から400トゥグルグ以上の月給の仕事を与えてはならない！」という通達が来ていました。内務省は地方行政機関に対してこのような厳しい指示を出していたのです。そのため，郡長は私に大きな仕事を与えるわけにはいきませんでした。

郡庁では，できる限り私を助けようとしてくれていました。けれども，内務省の通達を無視して私に良い仕事をさせれば，郡庁の幹部たち自身が解任される恐れがあります。それゆえに，郡長たちは私に大きな仕事を与えることはできなかったのです。それで私は，井戸のモーター管理，配管修理，錠前在庫管理，建設労働，草刈り班長などの仕事をしました。エレーンツァブ国営農場長は１度，内務省の許可がないと知りながら，私に月給600トゥグルグ以上の仕事に就けました。すると，この情報が内務省を通じて党中央委員会統制委員会に伝えられました。統制委員会から人が派遣されて私の状況を現地で取り調べました。

エレーンツァブの国営農場長は豪傑なブリヤート人でした。彼は「私はB.ニャムボーにこの仕事を就かせるにあたり，彼の能力を見た。B.ニャムボーのほかにこの仕事ができる者はわが国営農場にはいない。この仕事ができる人を派遣してくれるなら，私はB.ニャムボーをすぐに解雇することができる！」と言ったのです。わが国のブリヤー

ト人たちはしっかり自己主張ができますからね。降参なんて絶対にしないですよ。時には少々度が過ぎるかもしれません。ですから「ブリヤート人は柄を逆さにつけた斧のように強情だ！」という言葉があるくらいです。

私が地方に来てまもなく，モスクワ留学経費の支払を命じる請求書が届きました。この問題は党中央委員会第６回総会で審議されたことです。私は２万4,000トゥグルグを支払わなければならなくなっていました。当時では非常に大金です。私の収入ではどうしたって支払うことのできない金額です。留学経費支払いの件は裁判所で決定されていました。ドルノド県裁判所で審理されたのです。私は裁判で「私はモスクワに留学していました。私は任務として留学しました。自分に課せられた任務を遂行していました。私はよく勉強していました。私は自分の意志で留学をやめたのではありません！私の学業を，モンゴル人民革命党中央委員会が違法に停止させたのです。私に誤りはありません。ですから，私は学費支払いを認めません！」と言いました。しかし，県裁判所はモスクワ留学費用を必ず支払わせるという判決を強行しました。私は月給以外の収入のない人間ですよ。そして月給から支払うことになりました。私の羊飼い見習いの月給はせいぜい100トゥグルグでした。その100トゥグルグのうちの50トゥグルグを支払いにあてて，残りの50トゥグルグで生活しなければならなくなりました。月50トゥグルグで何年支払い続けたら借金が返せるでしょう？ところが，ドルノド県裁判所は「６ヶ月以内に完済しなければならない！」と決めたのです。そしてわが家の資産を差し押さえました。６ヶ月以内に返すことなどまったく不可能でしたよ。これは私を精神的に抑圧するための仕業にほかなりませんでした。

このような苦しい状況で私はY.ツェデンバル宛てに再び手紙を書きました。「私はモスクワ留学の経費を払います。しかし，ドルノド県裁判所の決定はひどすぎます。長期間にわたって給料から支払うことを認めてください！」と要請したのです。また，当時，私たちの子どもは非常に優秀でした。しかし，学校では「反党分子B.ニャムボーの子ども」と言われて，他の子どもたちから差別されていました。これについても適切な措置をとってくれるように私はY.ツェデンバルに要請しました。

そしてほどなく私の生活上に発生した困難な問題を現地で裁定すべく，党中央委員会統制委員会から人が派遣されてきました。ドノイン・プレブという人です。かつて司法省大臣だった人です。彼はやって来て「あなたの手紙を統制委員会は検討しました。返済は期限にしばられる必要はないと判断しました。長期の月賦を認めます。学校が子どもを抑圧することなどあってはなりません。あなたは一般の国民と同じようであるべきです！」と言いました。彼はドルノド県の幹部にも同じようなことを言ったようです。当時，ドルノド県の幹部は私に対して非常に冷たかったのでした。何か理由を見つけては，常に精神的に抑圧しようとしていたのです。これ以降，私の状況はいくらか改善されました。

**ＩＬ：**シャリンゴルにはいつ異動になったのですか？
**ＢＮ：**私はそこに1976年に来ました。当時，私は党中央委員会に宛ててもう１つの要請書を書いたのです。1964年12月の党中央委員会第６回総会よりもまえに，総会の準備作業について何人かの人たちから手紙を受け取っていました。言い換えれば，総会において私たちに敵対する人として誰が演説するかをはっきりと知っていました。このことに総会の主催者たちは大いに驚いたのでしょう。そして，総会後，私に情報提供した人びとを見つけるのに躍起になったようです。幸い，情報提供者は特定できなかったのでした。しかし，私に情報を提供した人たちを彼らは別な理由で解雇してしまったのです。

1976年に私はこの件で要請書を書いたのでした。すると返事はただちに届きました。回答者にはボギン・デジド内務大臣が署名していました。彼は私をウランバートルに来させて会いたいと希望していました。そこで，私はウランバートルに行きました。彼と私の２人の会見は内務省の前にあるビルの３階で行われました。私が部屋に入ると，B.デジドはすでに座っていました。卓上にはキャンディと果物が置いてありました。彼は「ツェデンバル氏より命じられました。あなたと会って，あなたの希望を聞くよう命じられたのです」と彼は言いました。そこで彼を通じてY.ツェデンバルに１つの希望を述べました。「わが家は子だくさんです。そのうち何人かはソ連に留学しました。私がモスクワに留学した経費は支払い終わりました。私をウランバートル近郊か，鉄道沿いの小都市で暮らすことを承認していただきたい！」と要請したのです。

B.デジドは私の要請をY.ツェデンバルに伝えたのでしょう。会見から数日後，私はまた彼に呼び出されて会いました。彼は「あなたの要請をY.ツェデンバル書記長は承認しました。この件については再度連絡します！」と言いました。こうしてドルノド県に帰ったのです。B.デジドは約束を守り，会見してまもなくシャリンゴルへの異動を承認する回答が届いたのです。シャリンゴルは当時開発されてまもない小さな炭坑都市でした。そこには小さな町が建設されていました。

## 15　ツェンデバルの更迭

**ＩＬ：**1984年の人民革命党中央委員会第８回総会ではY.ツェデンバル書記の問題をとりあげて，彼をすべての役職から解任する決定が出されましたよね。当時，あなたはシャリンゴルにいましたが，この総会についてのニュースはどのようにお聞きになりましたか？Y.ツェデンバル氏の問題について，ほかの解決方法はなかったのでしょうか？
**ＢＮ：**わが家がシャリンゴルに引っ越したころ，D.トゥムルオチルがダルハン市で暮らしていました。両者はとても近い街でしたよ。そのあいだは70キロメートル程度でしょう。私はそこに行ってD.トゥムルオチルとても仲良くなりました。彼もしょっ

ちゅうわが家に来るようになりました。私も彼のうちへよく出かけました。当時の私たちはそれ以外の人と会うのはたいへんでした。私たちと会った人は「シンパ」と見られ，仕事を解雇され，あるいは地方に追放されるかもしれないという脅威が現実としてあったのです。だから，私たちは他の人たちと会うつもりはありませんでした。そんな時でしたから，互いに会って話し合うのは大きな楽しみでした。ダルハンとシャリンゴルのあいだは列車で往来しました。私たちがしょっちゅう会っていることをもちろん内務省は常時監視していました。しかし，私たちが会うことを禁止することはありませんでした。

当時，私は「D.トゥムルオチルが国内の政治情勢について実に膨大な情報を得ているものだなあ！」と知りました。モンゴル人民革命党中央委員会幹部のあいだで話し合われていることや，彼らの仕事がどの程度進んでいるかとか，彼らのうちの誰がどんな問題を抱えているかとか，誰が愛人問題を抱えているかなど，きわめて詳細に知っていました。一般国民にはもちろん正確な情報は明らかにされません。そうした情報はたいてい噂や風評だけで広まっていました。しかし，D.トゥムルオチルにはとても大きな情報網があったようです。正確な情報が随時入っていることがわかりました。この党中央委員会総会での協議内容についても，D.トゥムルオチルは事前に情報を得ていたのです。

私は総会の直前にモンゴル人民革命党中央委員会に１通の手紙を書きました。果たして内務省はこの手紙について私に勧告しました。「あなたは手紙の中でモンゴル人民革命党書記長を侮辱している。このような手紙を再度書いた場合には処罰する！」と内務省は私に勧告しました。私は「思ったことは書いた。もうほかに言うべきことはない！」と言いました。そして調書に署名しました。

当時，内務省の課長であったD.ドルジ大佐が私と会いました。「そもそも私たちはあなたを処罰したいわけではない。２度とこのようなことを起こさせないための措置なのだ。もしも再びこのような手紙を書いたならば，刑法第92，93条と第49条の規定によって処罰する充分な理由となるのです！」と言いました。しかし，その後まもなく，私は約束を守ることができず，再び党中央委員会に宛てて手紙を書かなければならなくなりました。

そのころ，党中央委員会のS.ジャランアージャブ政治局員が定年で引退しました。そしてまもなく党中央委員会統制委員会から「S.ジャランアージャブは，Ts.ローホーズ，B.ニャムボー，B.スルマージャブらの反党グループの指導者の１人であった！」という誹謗中傷が出されました。S.ジャランアージャブは私たちと何の関係もありませんでした。ただ，党の第６回総会に参加するために私がモスクワから帰国した時に１度会ったことがあります。しかし，２人きりではなくS.ロブサンチョインボルと一緒でした。

S. ロブサンチョインボルはY. ツェデンバルの命令で来たと私は理解しました。しかし，S. ジャランアージャブは誰が派遣したかわかりませんでした。S. ロブサンチョインボル自身が随行させたのかもしれません。S. ロブサンチョインボルは「Y. ツェデンバル解任後，誰がどんな役職につくことが相応しいか？」などの問題について私と意見交換をしたいと言いました。彼は任命リスト案を作成して持っていました。おそらくY. ツェデンバルの命令によってS. ロブサンチョインボルが自分で作ったのでしょう。私を陥れようとしているのは明白でした。リストについてS. ジャランアージャブはまったく知らなかったようでした。S. ジャランアージャブは「Y. ツェデンバルの解任などありえない。彼より悪人が国家権力を握ったらたいへんなことになる！」などと私に言いました。私はこのような問題について彼らと話す必要はまったく感じなかったので，貝のように押し黙っていました。たとえば「Y. ツェデンバルのかわりに，閣僚会議議長にB. ジャンバルスレン内務大臣を任命したらどうか？」などと話にあがりました。B. ジャンバルスレンは高慢な性格で安心できない輩でした。しかし，Y. ツェデンバル自身が彼を登用して，いつもかたわに侍らせていたのです。

ところが，1983年に党中央委員会統制委員会のB. デジド委員長は，「このリストはS. ジャランアージャブが作成した！反党グループと人事について協議していた！」と彼を中傷したのです。党中央委員会統制委員会はS. ジャランアージャブをこのように誹謗中傷したのです。私は堪忍袋の緒が切れて「S. ジャランアージャブは私たちとは何の関係もない！」という内容の手紙を党中央委員会統制委員会宛てに送ったのでした。私はこうして内務省との約束を破りました。そして約束を破った以上は逮捕を待つこととなりました。夜半に扉を叩く者があると，「ああ，とうとう逮捕か！」と思いました。ときおりダルハンに来て内務省の車が止まっているのを見ると，「自分の逮捕の時もこんな車が来るのだろうな！」と考えるようになりました。そして「まあいいさ，逮捕するならしろ！」と開き直って，牢獄に入る準備をしていたのです。

そんなある日，家でテレビを見ていると，人民革命党中央委員会第８回総会について公報が読み上げられていました。その会議はモンゴル人民革命党書記長Y. ツェデンバルをすべての役職から解任しました。それを聞いてまず思ったのは「これで逮捕されることはなくなった！」ということでした。こうして私は実際，逮捕の危険を免れたのでした。この会議後，私はD. トゥムルオチルと会いました。D. トゥムルオチルは「Y. ツェデンバルが国を指導する能力に欠けることは，君や私が彼を批判したころからわかっていたよ。私たちは決して根拠のない批判をしていたわけではないのだから。それにしても，この決定は遅すぎたよ！」と言いました。

Y. ツェデンバルが無能なのをいいことに，A.I. フィラトワがまったく勝手気儘にふるまいだしたのです。まさにA.I. フィラトワが「私が国を指導することができる！」と言い出しかねないほどでした。Y. ツェデンバルの解任には，もちろんソ連共産党が関わっ

ていました。あちらでも夫人の行状に強く警戒していたのです。A.I.フィラトワの言葉がソ連共産党の言葉のように理解されていました。それをY.ツェデンバルがさらに権威づけていたのでした。最終的にモンゴル国民にまったく評価されなくなったA.I.フィラトワの所業は，モンゴル国民のあいだでのソ連共産党の評判を急速に落とす理由となったのです。

**KY：**Y.ツェデンバル氏はずっと若い時から仕事ができなかったとお話しになりましたね。当時，彼を助ける人はいたのでしょうか？

**BN：**Y.ツェデンバルが責任をまっとうする能力がないことはD.トゥムルオチルがはっきり述べています。彼はモンゴル人民革命党中央委員会総会においても，このことについて話していました。長いあいだ，主にCh.ロドイダムバとD.トゥムルオチルの２人がY.ツェデンバルの演説文を作成していましたよ。彼ら２人は直接ロシア語で作成していました。その後，D.ヨンドンがその任にあたりました。D.ヨンドンは一時，外務省副大臣を務めた人でしたよ。Y.ツェデンバルが唯一得意だったことがあります。彼は，他人の書いた文章を添削することが得意でした。他人が書いてくれた原稿を真っ赤になるほど修正していましたよ。これが彼の得意な仕事でした。Y.ツェデンバルはモンゴル人民革命党大会や総会での演説文を自分で作成したことなどまったくなく，D.トゥムルオチルやCh.ロドイダムバらの書いた文章を読んでいたのです。

**KY：**Y.ツェデンバル氏の専門は経済学とのことですよね。あなたは経済学者としては彼をどのように評価されますか？

**BN：**私は彼を経済学者としてはまったく評価していません。彼はまったくたいしたことのない経済学者でしたよ。モンゴル人民革命党書記長として提案し，自ら指導して創造したものなど何もないでしょう。「こんな仕事をわがY.ツェデンバル書記長が考えて実行しました！」などと言えるものが何も見当たりません。当時の「未開墾地開拓運動」や「協同組合化」などの全国的な大事業は，Y.ツェデンバルの業績ではありません。彼の下には，L.ツェンド，D.トゥムルオチル，D.マイダル，Ts.ローホーズなどの優秀な組織者たちが働いていたのです。彼らの力によってわが国の大事業が成し遂げられたのです。

われらがY.ツェデンバルは，人としては悪い人ではありませんでした。しかし，独自の政策を持たない，すべてをロシア・モデルで行おうとする，自らロシア人妻の手に落ち，またとても遅れた考え方をする，そんな人でした。そのために，仕事の能力はなかったのです。私は彼を私人として批判しているのではありません。ただ，仕事の能力がなくなったということが国家の発展に大きな障害となっていたのです。私はそのことだけを批判したのです。

私は悪意を持ってY.ツェデンバルの私事を党中央委員会総会で党員仲間のまえで批判したことはありません。決して侮辱したり，感情的に問題提起したりはしていないの

です。私の批判は具体的で真実であったことをY.ツェデンバル自身がよくわかっていました。ですから，彼は私を地方に追放したあとも，私に対しては悪い態度をとらなかったのです。

私が地方に異動させられた時，彼は３つの大きな支援をしてくれました。１つめは，モンゴル人民革命党中央委員会統制委員会の決定によれば，私はドルノド県のエレーンツァブ国営農場で「牧民」になるはずでした。家畜を放牧するなら，郡の中心地から離れて暮らさなければなりません。しかし，私の妻は医師でしたから，必ず郡の中心地で生活しなければなりませんでした。このような家族の事情を考慮し，Y.ツェデンバルは私を「牧民」ではなく，郡の中心地で生活することを承認したのでした。２つめは，子どもたちが大学に入学することを禁止しなかったことです。私の子どもたちは学業成績が優秀だったので，「彼らを大学で学ばせてほしい！」とY.ツェデンバルに要請しました。Y.ツェデンバルはそれを認めて「B.ニャムボーの子どもたちは学業成績が良いらしい。彼らをその希望に応じてほかの子どもたちと同じようにどこへでも学ばせてよろしい！」と認めてくれました。私と共に追放された人びとの子どもたちはみな大学入学を禁じられました。彼らは厳しく監視され，抑圧されていたのでした。私以外にY.ツェデンバルから子どもを大学に入れる許可を取った人はいません。３つめは，私は「ウランバートルから遠く，地方で生活するのはたいへんです。ウランバートルの近くで生活させてほしい！」と要請しました。彼はこの願いもかなえてくれました。当時，地方に追放された人びとの問題は，Y.ツェデンバルが単独で決定していたのです。彼のほかに追放問題について大なり小なり関わる人はいなかったのですよ。追放された人に関する問題はすべてY.ツェデンバルが自分でとりあげ，１人で決めていたのでした。

## 16　ツェンドvsトゥムルオチル

**ＩＬ：**Y.ツェデンバル氏は「モンゴル国家英雄」や「労働英雄」などの称号を授与されました。これについてお話しいただけますか？

**ＢＮ：**「モンゴル国家英雄」の称号を60年代初めに授与されました。「労働英雄」については，多くの人が彼に授与させることを快く思っていませんでした。多くの人が「労働英雄の授与は少し待ったらどうか。あとで授与してもいいだろう！」という立場でした。この件については，モンゴル人民革命党中央委員会政治局員のL.ツェンドが提案し，党中央委員会政治局局員と党ウランバートル委員会局員らが提案を受け入れました。L.ツェンド自身はY.ツェデンバルから要請されていたのかもしれません。ともかく彼は「Y.ツェデンバル氏に労働英雄称号を与えるべきである」という立場であったようです。L.ツェンド自身「Y.ツェデンバルは仕事ができない人間である！」という見解を支持していたのにもかかわらず，なぜ彼に「労働英雄」称号を授与させようとしたの

か？という疑問が生じます。Y.ツェデンバルに「労働英雄」の称号を授与することにL.ツェンドが固執したのは，政治的意図があったからだと私は思います。つまり，L.ツェンドにとっては，Y.ツェデンバルをモンゴル人民革命党書記長の役職から降ろすための準備の一環であったのかもしれません。彼に「モンゴル国労働英雄」の称号を与えて，「さあ，Y.ツェデンバルよ，これでさよならだ！もういいだろう。あとは私たちががんばりますよ！」というメッセージだったのではないかと思うのです。私はそう思います。L.ツェンドは，Y.ツェデンバルがもはや仕事ができないことを最も近くにいて見ていた人ですからね。それなのに多くの人が快く思わなかったY.ツェデンバルへの「労働英雄」称号の授与を強く支持していたことは，ほかに説明しようがないのです。

私は1度，L.ツェンドとのあいだで激しく対立したことがあります。それは，Y.ツェデンバルを解任して，L.ツェンドが自身をモンゴル人民革命党書記長に選出させようとしていたことと関連します。私は彼の考えを知って激しく対立したのです。私がウムヌゴビ県の党第1書記だった時に彼が訪れました。県の業務査察に来たのです。しかし，それは建前であり，他方で別の目的があったのです。Y.ツェデンバルを解任し，L.ツェンドをモンゴル人民革命党中央委員会書記長に選出する件が党中央委員会総会で協議されれば，私を支持してほしいということでした。私は「支持しない！」ときっぱり表明しました。L.ツェンドは私から支持が得られないことに対して激しく怒りました。そして彼は「ウムヌゴビ県の業務について，特別に問題提起してやる！」と言って去っていったのです。それに対して私は「わが県の業務について悪い評価をでっちあげるのは勝手です。が，それでも私はあなたを党書記長として支持しません」と言いました。

もともとL.ツェンドは，たいへん有能で，知識も豊富な，傑出した組織者ではありました。重要な地位にのぼりつめる才能を持った人だったのです。それでも私が彼を支持しなかった理由は，彼にはこのような有能な面と同時に大きな欠点があったのです。それはひどく裏表のあることでした。これはたいへん危険な資質です。裏のある人をモンゴルでは「悪い考えのある人！」「陰日なたのある人！」などと呼びます。国家のリーダーがそのような人では非常に危険な状況に陥る恐れがあると私は考えたのです。L.ツェンドが当書記長就任を画策していることについては，ソ連のKGBからY.ツェデンバルの耳に情報が入ったようです。

当時，L.ツェンドとD.トゥムルオチルの関係は非常に悪化していました。もともとは20年以上も共に働き，互いに熟知する友人関係だったのですよ。ところが，最後には対立して和解することはありませんでした。私たちはその原因が何なのか，当時はまったくわかりませんでした。あとになって明らかになったのですが。当時，モンゴル社会において，Y.ツェデンバルについてのさまざまな悪評がかなり高まっていました。国民は「まもなく退陣するだろう！」という空気になり，それを待つ雰囲気になりまし

た。このような状況で，Y. ツェデンバルは危機を回避する措置を取り始めたのです。

彼の計算では，最も危険な人物がD. トゥムルオチルでした。D. トゥムルオチルはモンゴル人民革命党の総会でしばしばY. ツェデンバルを激しく批判していました。国民の中でもD. トゥムルオチルの人気は高まっていました。彼は「Y. ツェンバルよ，もう辞めるべきだ。国家も国民生活も厳しいではないか！」と直接進言していたでしょう。だから，Y. ツェデンバルは「危機はトゥムルオチルの方向から来る！」と考えていたようです。

当時，Y. ツェデンバルの頭の中には「D. トゥムルオチルをいかにして排除するか？」という問題が巡っていたことでしょう。Y. ツェデンバルは，この任務にL. ツェンドを利用することに決めたのです。L. ツェンドもY. ツェデンバルを辞めさせて自分が党書記長に選出されようと考えていた人ですよ。その実現のために「最も障害となるのはD. トゥムルオチルである」とL. ツェンドも考えたでしょう。Y. ツェデンバルとL. ツェンドの２人は，両者の異なる目的から同盟し，D. トゥムルオチルを失脚させ，地方に追放したのです。

この後，しばらくして時が経つに連れ，Y. ツェデンバルは自分の身に危険が迫っていることを次第に理解するようになったでしょう。今や，彼をL. ツェンドから守る強力な人物が取り巻きにいなかったのです。Y. ツェデンバルは自然にL. ツェンドの手の内に落ちたようになってきたのでした。L. ツェンドがY. ツェデンバルを退陣に追い込むことはもはや時間の問題のように思われました。Y. ツェンバルは状況を理解し，迅速な対応を取り始めました。「D. トゥムルオチル以外に自分の助けになる人材はいない！」と気がつきました。そして，D. トゥムルオチルの復権をY. ツェデンバル自ら提案し，党中央委員会メンバーの支持を得るべく努めはじめたのです。まさにこの時期に私はY. ツェデンバルと１度会いました。彼は「D. トゥムルオチルを旧職に復権させなければならない。L. ツェンドの言葉に従って彼を罷免してしまった。君の見解はどうかね？君は党中央委員会の影響力のあるメンバーでしょう！D. トゥムルオチルの復職に反対する人も多いだろう。君は私を支持してくれたまえ！」と言いました。

ところが，D. トゥムルオチル自身がY. ツェデンバルの提案を「何の理由もなかったのにあなたがたが失職させたのですよ。私はもう政治には関わらない。研究生活を送ります！」ときっぱりと拒否したのです。ここにいたってY. ツェデンバルは，「D. トゥムルオチルの側から自分に対して何の危険も及ぼすことがない！」ということを理解したのでしょう。長い説得の末，D. トゥムルオチルに復職を納得させました。この問題を審議した人民革命党中央委員会総会では，彼の復権について１人の反対も出ませんでした。D. トゥムルオチルも決して欠点のない人ではありませんでした。非常にわがままで頑固な性格でした。しかし，知識や教養，才能という点で驚くべき人でした。当時のモンゴルでは希有な人物でした。Y. ツェデンバルとD. トゥムルオチルの関係が長続

きしないことは誰にも明らかでした。Y.ツェデンバルの頭には「次はD.トゥムルオチルをどうするか？」という問題がふたたび巡り始めたことでしょう。

D.トゥムルオチルは復職してL.ツェンド問題を解決したあと，「個人崇拝の悪弊を除去する」キャンペーンに関わりました。これは，Y.ツェデンバルの最も触れられたくない問題です。Y.ツェデンバルがKh.チョイバルサン時代に「政治粛清」にどのように関与していたかを最もよく知る人物の１人がD.トゥムルオチルでした。これについての資料がどこにあるかも彼はよく知っていました。この運動で，D.トゥムルオチルの最終目的がどこにあったのかを推測するのは困難です。もしかすると，Y.ツェデンバルを常に抑止しようとしていたのかもしれません。この運動の結果，Y.ツェデンバルは行き場を失って追いつめられることがD.トゥムルオチルにはよくわかっていたでしょう。

この状況を脱却する道をY.ツェデンバルは発見しました。このようにY.ツェデンバルは悪事には長けた人だったのですよ。すべての権力が自分に集中しているのを利用して，たくさんの不正をはたらきました。Y.ツェデンバルは「民族主義を高揚させ，モンゴルとソビエトの友好に敵対した！」という理由でD.トゥムルオチルを失脚させたのです。D.トゥムルオチルは「私は指導者になるような人物ではない。性格が悪いから敵をたくさん作ってしまうだろう。自分は研究の仕事をしたい。モンゴルの歴史を研究して，教員として教えることができればそれでいい！」と語っていた人でした。1962年に開催された党中央委員会第３回総会でD.トゥムルオチルはふたたびすべての役職から解任されました。

L.ツェンドの方からY.ツェデンバルを解任する問題についてソ連共産党委員会政治局の何人かと意見交換をしていたようです。しかし，彼らはツェンドの意見を支持しなかったようです。そうしてツェンドの敗北は仕方なくなってきました。1963年の秋，ツェンドは解任されました。ツェンドは１度も公式の場でツェデンバルを批判したことはありませんよ。彼は言葉に重みを持たせ，少ない言葉で大きな意味を込めることのできる人でした。ツェンドはザブハン県に追放されました。L.ツェンドはこうしてモンゴルの政界から消え，再び戻って来ることはありませんでした。一方，L.ツェンドを失脚させたのち，Y.ツェデンバルは政治闘争についてかなりの経験者になったことでしょう。

私はトゥムルオチルが解任された当時，モンゴルにいませんでした。モスクワに留学していました。総会の翌年，私はD.トゥムルオチルと１度会いました。彼が私に電話をしてきて，「会いたい！」と言うのです。そして彼はわが家に来ました。私たち２人は１本の蒸留酒を置き，彼は党中央委員会総会について話してくれました。D.トゥムルオチルは「最初から非常によく準備されていて，私が発言したり，自己弁護したりする機会はまったく与えられなかった！」と話していました。そして「近いうちに機会を

作ってY.ツェデンバルに会いたい。要請を出したが拒否されている。君がY.ツェデンバルと私が会う機会を設定してほしい！私はバヤンホンゴル県建設部長に任命された。私は自分の専門を活かして働きたいのだ！」と言うのです。私たちがわが家で会っていることを内務省は嗅ぎつけていました。

当時，わが家の電話は内務省に盗聴されていたのですよ。そんな状況でしたから，D.トゥムルオチルと会った翌日，私はすぐにY.ツェデンバルの執務室に行き，D.トゥムルオチルと会ったことについて，何を話したかについて，すべてを話しました。そして「私がD.トゥムルオチルを支持していることはご存じの通りです。彼は国にとって必要な人材ですよ。彼はあなたに面会を求めています。けれども何らかの理由によって会えずにいます！」と彼に言いました。するとY.ツェデンバルは「さあ，それなら，近いうちに彼と会うことにしよう！」と答えたのです。私はこれをD.トゥムルオチルに伝えました。彼も喜んだようです。こうしてまもなく私はモスクワに戻りました。

次の年の夏，私はD.トゥムルオチルにY.ツェデンバルとの会談について聞きました。すると彼は「そんなものはまったくない！奴はそういう人間なのだ！約束したことを実行することなんてめったにないのだ！」と言うのでした。D.トゥムルオチルは真に広い知識を持っていました。人民革命党の各県委員長がウランバートルに仕事に来ると，まずD.トゥムルオチルの執務室に集められ，国の内外の情勢について講義し，助言してくれるのです。そして私たちから地方の状況について聞き取りをし，質問するのです。質問に答えられなければ「そんなことで国を担っていけるか？その肩の上に乗っている球体（頭のこと）を少し働かせてみたらどうだ？少しは中身を充実させろ！あちこちの祭りのことばかり考えているのか？」と叱られたものでした。

各省の大臣にはもっと厳しかったようです。「君は発展の速度に合わせて仕事ができないようだ。国の発展を妨害する代わりにさっさと辞表を提出する必要がある！」と叱りつけるのですよ。そしてモンゴル人民革命党中央機関紙『ウネン』でも，大臣を名指しで「仕事ができないでいる！」と批判するのでした。当時，大臣をこのように批判できる場や人はほかにありませんでした。そのため一般国民はD.トゥムルオチルのやり方を歓迎していました。ときおり，D.トゥムルオチルに批判された大臣たちは反発していました。

**ＩＬ：**1990年に「Y.ツェデンバルの取り巻き」についての事件が送検されています。この事件はどうなりましたか？

**ＢＮ：**「Y.ツェデンバルの取り巻き」とは，長いあいだ彼と一緒に仕事をしてきた，D.モロムジャムツ，T.ラグチャー，D.ソドノム，B.デジド，P.ダムディン，S.ラムジャブ，M.ペルジェーなど30名ほどの人のことです。彼らはY.ツェデンバルと長期にわたって一緒に仕事し，彼を守り，誤りを隠蔽してきた人たちです。1990年の第20回党大会で初めて彼らは「ツェデンバルの取り巻き」とされました。彼らは党を除名されました。

そして，国の財産を着服していた状況が明らかになったのです。国家経済を落ち込ませ，多額の国家財産をあたら消費し，濫用したことが追及されました。Y.ツェデンバルが国家を指導していく能力に欠けていることを知りながら，それを国民に隠し，彼を擁護し，同調していたことで，付随する利益を得ていたという問題が指摘されたのです。

この事件は検察に送られてからたいへん長期化しました。当時はモンゴル人民革命党の影響力が強かったのですね。裁判所にも検察庁にも，あいかわらず人民革命党員が勤めていたのです。「Y.ツェデンバルの取り巻き」事件を最高裁判所で担当していた判事がD.シャラブドルジです。彼は2004年の選挙後の連立政権で，人民革命党側から国防大臣になった人ですね。彼が，この事件を２年間にわたって抑え続けたのです。そして最終的に「犯罪は成立しない！」との決定を最高裁に出させ，幕を閉じてしまったのです。本当は彼らに刑を科すのに充分な根拠はあったのですよ。

**ＩＬ**：Y.ツェデンバル氏のたくさんの勲章は剥奪されました。これはP.オチルバト氏の命令でされた仕事でしょうか？

**ＢＮ**：モンゴル人民革命党の第20回特別大会で，Y.ツェデンバルは党を除名されました。そしてこの大会で選出された新しい党中央委員会政治局の会議で，Y.ツェデンバルに授与された勲章のうち，主要な５つを剥奪する決定が出されました。当時は人民革命党政権ですね。当時のオチルバト大統領が，人民革命党中央委員会政治局の決定にもとづいて大統領令を発し，勲章を剥奪したのです。

## 17　民主化以降

**ＩＬ**：1990年３月にモンゴル人民革命党政治局員が総辞職しましたね。この決定についてはどう評価していますか？

**ＢＮ**：まったく正しい決定でした。この決定にはJ.バトムンフ人民革命党書記長が大きな役割を果たしました。当時，ウランバートル市中心のスフバートル広場では，若者たちがハンガーストライキをしていましたよ。モンゴル人民革命党政治局員の中には辞職を強く拒否していた人もいました。彼らは力を行使してハンストを解散させようとしていたのです。また全国に「非常事態宣言」を出させようと画策していたようでもあったのです。これに真っ向から反対したのが，当時の内務省副大臣であったTs.ジャムスランジャブ将軍です。

当時は民主化運動がモンゴル社会全体に支持されていたのです。そんな時にハンストに参加する若者たちを力ずくで抑えれば，たいへん危険な状況になることは目に見えていました。1989年の中国の天安門事件がモンゴルで繰り返されるところだったのです。このような厳しい時期に，J.バトムンフ書記長が，政治局員の総辞職という英断を行ったのです。J.バトムンフはたいへん穏やかな人です。Y.ツェデンバルとは同郷です。彼

をY.ツェデンバル自身が登用し，首相に任命していたのです。J.バトムンフはもともと教師です。政府の要職につくことを自身ではそれほど望んではいなかったようです。ずっと教師でいたかったようなのです。人民革命党政治局員の総辞職は，彼がほぼ単独で決断したと言えるでしょう。

**KY：**モンゴルで民主化が始まってから15年が過ぎました。現在の状況をどうご覧になりますか？

**BN：**民主化運動が始まってから15年のあいだに，民主勢力は１度政権を握りました。それ以外はずっと人民革命党政権です。モンゴル人民革命党は，さまざまな過ちを犯してきましたが，人材と経験が豊富で，基礎もしっかりしている政党です。しかし，今日の問題に旧態依然たる対応をすることも見られます。

2004年の選挙では，民主勢力がほぼ勝利したと言えます。実際に勝っていたのです。しかし，人民革命党側で，選挙結果にけちをつけて修正しようとしています。人民革命党と民主党が，わが国の２大政治勢力であることは明らかです。この２大政党がバランス良く交代で政権を担うことが望まれます。決してお互いを敵視し否定していてはならないのです。選挙の結果，人民革命党と民主党は「協議合意」によって連立政権を樹立しました。これは最良の決断でした。

しかし，N.バガバンディ大統領は民主勢力を嫌っている人です。N.バガバンディが大統領になってから，国民の利益を擁護するような政策が実施されていません。彼は非常に狡猾な人間です。民主勢力のD.ガンボルドを首相に任命しませんでした。N.バガバンディはモンゴルの民主勢力にとって大きな障害となってきた人です。また，M.エンフサイハンは，民主勢力の名前を使って上の地位を狙っており，最悪の人間です。民主勢力の中で民主化のまさに最初からずっといるのはR.ゴンチグドルジやTs.エルベグドルジたちでしょう。

**ＩＬ：**先ごろ，大統領選挙が行われました。この選挙がどのように行われたかについて，わが国の報道でさまざまな論評がされています。この選挙についてはどのような見解をお持ちですか？

**BN：**モンゴル人民革命党のN.エンフバヤル候補について，人びとのあいだでさまざまな噂があります。いろいろな多額の賄賂に関わっていると言われています。たとえば，かつてのロシアへの「負債」を返済する時に，その中の「5,000万ドルを浪費した！」という話や，「自らの病気治療に国家予算から5,000万トゥグルグを現金で供出させた」という話はずっと言われ続けています。また，「ツォルモン夫人が国政に関与している。内務省に顧問を任命した！」という噂も尽きずに広まっています。「ツォルモン夫人が内務省に顧問を任命した」ということ以外は，根拠のない噂です。本当にこれらの多額の賄賂にN.エンフバヤルが関わっていたかどうかは証拠をもって証明しなければならないでしょう。証明できなければ，これらの話は風説による名誉毀損になります。